

# 黒田裕子氏の資料等分析による 被災者支援の検証と継承

Learning from Yuko Kuroda's Disaster Survivors Support : Analysis of Her Bequeathed Documents

阪神·淡路大震災記念 人と防災未来センター

The, Great Hanshin-Awaji Earthquake Memorial
Disaster Reduction and Human Renovation Institution (DRI)

## はじめに

人は何かの衝撃を受けた時、それがきっかけとなってそれまでの生活とまったく変わる場合がある。人生観が変わり、それに伴って考え方、行動様式が変わるということである。この変化は一見不連続的に見えるが実は本人の中では連続しているのだろう。すなわち自分が変わったという意識がない。黒田裕子さんもその変化を経験した人である。阪神・淡路大震災が起こったとき彼女は宝塚市立病院の看護師であった。決して阪神・淡路大震災直後からの彼女の行動を予見できるような人ではなかった。彼女が看護師として奉職した兵庫医科大学病院から宝塚市民病院に至る過程でこの震災後に変身する必然性を見出すことはできない。なぜ彼女が看護ボランティアの在り方を率先垂範することで示したのか。残念ながらその疑問の答えを直接本人から聴くことができない。

黒田さんの場合、お亡くなりになってから約 200 点の資料が人と防災未来センターに寄 贈された。そして、震災資料専門員と主任研究員らの解析が始まった。彼らは直接、黒田さ んと話をしたこともない。しかし、阪神・淡路大震災直後からの黒田さんの行動があまりに も独創的でしかも被災者に寄り添うという一貫した姿勢が、災害看護の在り方について学 ばなければならない多くのことを教えてくれているのではないかと考えるからである。筆 者は黒田さんとお会いして言葉を交わしたことは何度もあった。でも、何が話題だったかは 覚えていなく、それよりも「稲むらの火」で有名な和歌山県広川町に私が講演に行った帰途、 JR 紀勢線の「湯浅」駅で偶然お見かけした彼女のたたずまいが脳裏に焼き付いている。彼 女は真っ赤なオーバーコートに赤のピンヒールというおしゃれな装いであった。黒田さん は看護ボランティアを継続しながら、被災者の立場から看護の在り方を考えていたことは 間違いがない。筆者はかつて文部科学省の「博士課程教育リーディングプログラム」の審査 員であった。そこで、全国の看護系の博士課程を有する5大学が参画する「災害看護グロー バルリーダー養成プログラム | が採択され、 その中間評価なども行ってきたが、 阪神・淡路 大震災を経験して世界でトップレベルにあると言われていたわが国の看護学であるが、後 進を育てるという意味で系統的な教育と研究指導が行われておらず、しかも国際性がない 未熟さもわかってきた。その時、審査に平行してどのようにすればよいのかについても審査 員間で激しく議論した記憶がある。共時性というか、そのとき黒田さんも現場で活動してい た。きっと彼女は看護ボランティアを実践しながら、災害看護学の在り方を考え、それを体 験するにつれて現状との乖離から孤独感を強められたのではないだろうか。ボランティア ゆえに変革に寄与できない無力さを覚えていたのではないだろうか。

本報告書が彼女の言動から、災害看護学の在り方について何を私たちに伝えたかったのかを示していただけると期待している。

阪神・淡路大震災から26周年を前にして

# 黒田裕子氏の資料等分析による被災者支援の検証と継承

14	10	W	1-
は	レ	$\alpha$	'

第1章 本活動の経緯	1
1.1 はじめに	1
1.2 宇都幸子氏へのヒアリング調査	1
1.3 資料室での企画展示	4
1.4 日本災害医学会での発表	9
1.5 気仙沼市における資料確認およびヒアリング調査	10
第2章 仮設住宅での支援(中平遥香)	12
2.1 はじめに	12
2.2 分析の目的と方法	13
2.3 ふれあい訪問シートとは	14
2.4 考察: 黒田裕子氏が遺してくれた資料とは	21
第3章 被災者支援の進展(木作尚子、髙岡誠子)	23
3.1 はじめに	23
3.2 分析の目的と方法	24
3.3 分析結果	26
3.4 考察: 福祉的な被災者支援と災害看護	34
第4章 触れる・わかる・支える 黒田裕子の看護哲学の再構成(高原耕平)	38
4.1 触れたらわかります	38
4.2 問題の所在および方法	39
4.3 先行研究	41
4.4 分析	42
4.5 考察: 黒田の看護哲学は「看護」なのか?	47
第5章 黒田氏との思い出	50
5.1 黒田裕子の後ろ姿を追って(宇都幸子)	50
5.2 黒田さんとのいくつかの機会(小林郁雄)	53
5.3 黒田裕子さんが言い残したこと(山崎登)	56
5.4 黒田裕子さんの思いで(室崎益輝)	58
次料短	;

# 第1章 本活動の経緯

#### 1.1 はじめに

本プロジェクトは、2018年9月に人と防災未来センター(以下、「センター」と呼ぶ)資料室へ「阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク」<sup>1)</sup>から震災資料を寄贈していただいたことがきっかけとなり始動した。仮設住宅で黒田裕子氏らが行なった被災者支援の実態をつづった大変貴重な寄贈資料を何らかの形で活かす必要があると考え、看護、福祉、仮設住宅支援など、それぞれ関心のあるテーマを持ったメンバーが集まって特定研究プロジェクトを立ち上げた。寄贈された資料を素材に阪神・淡路大震災時の教訓やノウハウを抽出し、①これまでの災害時の被災者支援体制等にどのように活かされているのか、②今後の災害にどのように備えていくべきかを明らかに出来ればと考えた。

本プロジェクトは、センターの研究員と震災資料専門員の協働で進めていった。まずは黒田裕子氏についてより深く知るために、寄贈資料の整理・閲覧、黒田氏が執筆した図書や雑誌の整理・閲覧、関係者へのヒアリング調査を行なった。その後、それぞれの関心のあるテーマや視点に沿った研究素材を抽出し、分析を進めていくこととした。

第1章では、本プロジェクト1年目の活動として実施した資料整理、ヒアリング調査、発表等について述べる。

第2章から第4章では、それぞれのメンバーの関心のあるテーマに沿って分析をしている。(第2章「仮設住宅での支援(執筆:中平遥香)」、第3章「被災者支援の進展(執筆:木作尚子、髙岡誠子)」、第4章「触れる・わかる・支える 黒田裕子の看護哲学の再構成(執筆:高原耕平)」)

第5章には、黒田氏と活動を行ったり影響を受けた方から「黒田氏との思い出」について 寄稿いただいた内容を掲載している。

本レポートは、多分野の研究者が黒田氏を多角的に捉えている。そのため、章によって矛盾を生じていることもありうるが、視点によって黒田氏の活動の捉え方が異なるということも興味深いため、あえて内容を調整していない。本報告書から、黒田氏の様々な面を感じ取っていただければ幸いである。

#### 1.2 宇都幸子氏へのヒアリング調査

2019 年 9 月 24 日、阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク事務所内で、現代表である宇都幸子氏にヒアリング調査を行った。我々が調査にうかがった日は偶然にも黒田氏の命日でもあり、黒田氏が宇都氏と引き合わせてくれたような気持ちにさえなった。

ヒアリング調査では、当センターに資料を寄贈してくださった経緯や、阪神・淡路大震災 時の活動状況、黒田氏との思い出など、様々なことを語っていただいた(写真 1-1)。



写真 1-1 宇都幸子氏ヒアリング調査の様子 (2019 年 9 月 24 日撮影) 注:向かって左から宇都氏、髙岡、高原、木作(研究部)撮影:中平(資料室)

#### 1.2.1 資料が寄贈された経緯

2018年9月に受領した寄贈資料は、地下鉄伊川谷駅内にある伊川谷工房を閉鎖する際に、阪神高齢者・障がい者支援ネットワークのメンバーが整理した資料である。阪神・淡路大震災後に支援に入った仮設住宅「西神第7仮設住宅」での活動記録から活動拠点のひとつであった伊川谷工房が閉鎖するまでの記録が残存している。阪神高齢者・障がい者支援ネットワークは、以前にも当センターに資料を寄贈しており、その時は仮設住宅を閉鎖したタイミングでの寄贈だった。今回の寄贈は、仮設住宅支援以降の活動約15年分の資料を含めた寄贈である。

黒田氏の死後、最初は資料を処分しようと考えていたそうだが、図書などの書店で購入できる資料以外に、当時のことを記録した紙資料はこのまま捨てるのではなくとっておこう、また、これらの資料を保存するだけでなく、資料を死蔵させず誰かが資料を役立ててくれればという思いから、資料も保存でき、閲覧も可能な施設はないかということで、当センターを訪ねてくださった。

寄贈資料は約200点あり、センター資料室では現在整理を進めている(写真1-2、写真1-3)。個人情報が含まれるため公開が困難な資料も多い。そこで、令和元年度資料室企画展で「被災地のナイチンゲール〜黒田裕子が遺したもの〜」と題した企画展を開催、一部資料を展示した。企画展の詳細についてはp.4を参照されたい。







写真 1-3 寄贈資料の一部

## 1.2.2 仮設住宅での黒田氏の活動

宇都氏は、黒田氏は仮設住宅での支援を経て、その後の震災で福祉や看護の考え方に影響を与えた反面、震災をきっかけに黒田氏自身も周りの人々から影響を受けたのではないかと語った。震災以前は、黒田氏が知っているのは看護の世界だけあったが、震災や仮設住宅での支援を通じて、看護以外の世界も知るようになり、地域や人の暮らしなど、今まで見えてこなかった世界も見えるようになってきた。ボランティアを通じて、自分の専門外の世界や研究者や学生たちと議論していくうちに学びが広がり、避難所や仮設住宅支援でのアイディアや工夫へと繋がったのではないかと語った。

支援を手伝った学生ボランティアに対して黒田氏が非常に厳しかったことは有名である。仮設住宅での孤独死という問題が大きく取り上げられるようになった頃、ボランティアを希望する学生が黒田氏の元を訪れた。黒田氏はその学生に対し、「あなたはまだ学生だから、社会人になってからだってボランティアはできるんだから、一旦帰りなさい。社会人になって、生活するというのがどういうことか分かったらおいで」と言ったそうだ。あくまでも推測の域を超えないが、黒田氏はボランティアの厳しさを人一倍実感していたため、その厳しさを知ったうえで、ボランティアをして欲しかったのではないか。また、仮設住宅での支援が短期的な支援では終わらないことを、早い段階で想定していたと思われる。学生ボランティアは、学校の授業が再開すると支援活動から離れることが多い。一定のボランティア期間が終了しても、被災者の仮設住宅生活が終わることはない。一方で、ボランティアする側の人生も大切にして欲しいという、黒田氏なりの優しさであったのではないかと感じた。

仮設住宅支援という過酷な支援を乗り越えた黒田氏だからこそ、長期的な支援ができるような仕組み、工夫、信念を持ち、組織の中心となって支援活動に取り組んでいたことが、 宇都氏の話からも伝わってきた。

### 1.3 資料室での企画展示

2019年12月13日~2020年3月8日<sup>2)</sup>、センター西館5階資料室で令和元年度資料室企画展「被災地のナイチンゲール~黒田裕子が遺したもの~」というテーマで企画展を開催した(写真1-4、写真1-5、写真1-6)。2018年9月に寄贈を受けた黒田裕子氏資料の中から「黒田氏が使用していた手帳」や「西神第七仮設住宅名簿」などを展示したところ、当時の関係者や医療関係者ら多くの方が展示を見に来てくださった。



写真 1-4 企画展チラシ



写真 1-5 資料室企画展開催の様子



写真 1-6 資料室企画展を見学する甲斐達朗氏

この展示の目的は、①黒田裕子氏の多面的な人物像を改めて掘り下げること、②寄贈資料の活用とその課題(とくに個人情報を含む一次資料)を探るという2点にあった。

①は、被災者に対する献身的なボランティア看護師としての姿だけでなく、支援活動を合理的に組織化し改善してゆく管理者としての姿や、後進を厳しく育てる教育者としての姿や、法制度等の改善のために奔走する改革者としての姿も重要であると考え「被災地のナイチンゲール」という人物像を提示することを目指した。

②は、震災を知らない人々も当時の状況を追体験することができるという利点を活かした展示を開催しようと考えた。我々は25年前の震災当時を体験することはできず、震災を経験していない世代がその時代背景(例えばインターネットや携帯電話が普及していない時代)を想像することは容易ではない。しかし一次資料(写真や紙資料)は当時を追体験・イメージする手助けをしてくれる。展示に訪れた来館者が写真を見て当時を懐かしむ姿なども見られ、当時のことを思い出すための素材として効果的であったと考えられる。

また、この展示は新聞記事にもとりあげられた。新聞記事を見て来館してされた方も多数いた。

阪神・淡路大震災から25年を前に、神戸市中央 区の人と防災未来センター西館に13日、 自然災害 に関する資料約3千点を収蔵した「河田文庫」が 開設された。隣接する資料室では、同文庫を紹介 する展示や、阪神・淡路の仮設住宅で被災者支援 に尽力した故黒田裕子さんの足跡を振り返る企画 展が始まった。

(竹本拓也)

#### 人と防災未来センター 企画展

# 足跡た





## ■ <sub>故</sub>黒田裕子さん

ら神戸市西区の「西神第7 2014年に73歳で亡くな ンゲール~黒田裕子が遺し 時間態勢で見守りなどを続 め、4年3カ月にわたり24 仮設住宅」に泊まり込み、 たどる。 った黒田裕子さんの活動を 外で被災者支援に尽力し、 たもの」は、阪神・淡路や った黒田さんは震災直後か 東日本大震災をはじめ国内 孤独死や寝たきりを防ぐた 宝塚市民病院の看護師だ 企画展「被災地のナイチ 黒田さんが代表を務めた チラシ、訪問の際の注意点 住宅内で開いたイベントの たことがうかがえる。仮設 被災者支援に身をささげ 込まれ、寸暇を惜しんで せのメモがびっしりと書き をまとめた年表など約30点 路以降の被災地支援の軌跡 に寄贈した。企画展では、 料を人と防災未来センター 9月、約200点の関係資 支援団体の後継団体が昨年 が並ぶ。 訪問記録や手帳、阪神・淡 をまとめたマニュアルもあ 手帳には講演や打ち合わ



田恵昭センター長=いずれも所蔵資料について説明する河 神戸市中央区脇浜海岸通1

# ■ 河田恵昭センター長

ている。 で示唆に富む資料が充実し た高潮被害の報告書など、 現在の災害対策を考える上 94年に中国・温州であっ 昭センター長(73)が長年収 究の第一人者である河田恵 復興計画検討委員会や19 論に関する書類、神戸市の 者だけでなく一般の人も関 入らないものもあり、研究 や学会資料など一般に手に を収蔵。自治体の防災計画 集してきた災害関連の資料 質できる。 災害廃棄物処理を巡る議 同文庫は、 防災・減災研 模の公開を目指したい」 富にある。今後は1万点規 の収集資料約19万点の大半 続けて河田さんが西館5階 制を確立した研究者の資料 研究主幹が「日本の防災体 のだが、震災前の資料も豊 は阪神・淡路大震災後のも レートを取り付けた。 きな意義がある」と解説。 し、広く発信することは大 を分かりやすい形で整理 **悪気込んでいた。** ンターの牧紀男・震災資料 設けられた部屋の前にプ 河田さんは「同センター 13日の開設式では、 同セ

【メモ】展示はいずれも来年3月8日まで。午前9時半~午後5時半。月曜と29日~来年1月3日は 閉室。人と防災未来センター資料室2078・262・5058

神戸新聞朝刊(人と防災未来センター企画展 防災、被災者支援 足跡たどる) 2019年12月14日付

ح



産経新聞朝刊(災害看護 被災地に「遺産」 阪神大震災25年) 2020年1月12日付

今回の展示では、来てくださった方々がどのような感想をもったのかじっくり話を聞く ことができなかった。 一次資料を使用しての展示に不慣れなため、十分な展示ができなか ったことと思うが、足を運んでくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

#### 1.4 日本災害医学会での発表

2019年3月、日本災害医学会にて「黒田裕子氏関連資料の活用に向けた取り組み~人と防災未来センター資料室における整理・展示~」と題してポスター発表を行った(写真 1-7)。本発表では、プロジェクトチームを立ち上げてから資料室企画展までの経緯、展示物の紹介を報告した。

日本災害医学会での発表だったため、黒田氏と当時活動した方なども発表を聞いてくださり、企画展に足を運んでくださった方もいた。阪神・淡路大震災時の黒田氏の活動を記録した貴重な資料が当センターに寄贈されたことや、その資料をもとに企画展を行うことを学会に参加している方々に知っていただいたのは大きな成果である。

また、企画展では、個人情報の関係で中身が公開できない資料も数点あり、それらを少し取り上げて発表を行った。個人情報の入った資料をどこまで公開し、来館者に分かりやすい展示にしていくかは今後の課題である。

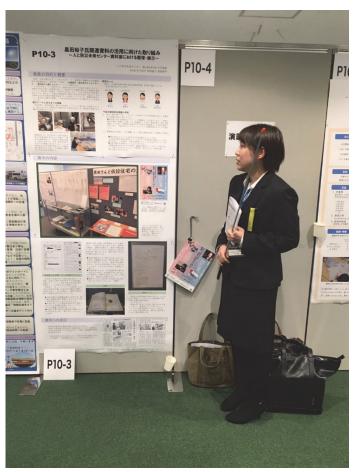


写真 1-7 日本災害医学会での発表の様子

#### 1.5 気仙沼市における資料確認およびヒアリング調査

#### 1.5.1 東日本大震災時の活動資料の確認

2019年12月3日~4日に気仙沼市で現地調査を実施した。2011年の東日本大震災の際、黒田氏はこの気仙沼市を中心に支援活動を行っている。調査当時、東日本大震災での黒田氏の活動資料が気仙沼市危機管理課で保管されていた。資料は大型段ボール箱2箱に格納されており、黒田氏が支援に入っていた面瀬中学校区の仮設住宅での個人カルテや管理日誌、ボランティア出入り表、手作りポスターなどがみられた。短時間の調査時間となり、資料内容を精査するには至らなかったが、阪神・淡路大震災時の教訓やノウハウからフォーマット等が一部変更されていることがわかった。

#### 1.5.2 被災者 (O氏) へのヒアリング調査

O氏は面瀬中学校区の仮設住宅で黒田氏の支援を受けた被災者の一人である。仮設住宅での自治会を設立する際に黒田氏が24時間支援を申し出たことで、お願いするしかないと思ったそうだ。24時間支援をお願いするにあたって、行政は当初、集会所であって宿泊施設ではないという考えのもと反対していたが、「宿泊」ではなく「24時間支援だ」ということを説得したところ、認めてもらえたとのことであった。この24時間支援を受けたことをO氏は「日本一幸せな仮設の生活を送らせてもらうことができた」と述べている。特に看護師で構成されるボランティア組織ということで支援をしてもらっていたので、血圧を測ったり、体調が悪くなった時は夜でもすぐに見てくれることが心強かったようだ。

一方で、他のボランティアとの衝突があったこともお話してくださった。被災者の O 氏からすると、どのボランティアも等しく応援してくれる人であるが、黒田氏は信念が強いあまり他のボランティア団体への配慮に欠けている部分があったと指摘された。ただ、それは黒田氏の揺るがない信念があったからこそ起こり得た場面かもしれない。黒田氏は阪神・淡路大震災以降支援を行っていく中で、心無い人からナイフを突きつけられながらも活動したこともあるという。また、自分には構うなと思う人も被災者の中にはいたと思われるが、そうした被災者に対しても黒田氏の信念は揺るがず、支援を続けられている。他のボランティア等からの反発もあったかもしれないが、信念が揺るがないほど強い人だからこそ、心強くもあり、被災者を安心させる部分があったともO氏は語った。

○氏へのヒアリング調査の中でもう一つ印象的だったのは、黒田氏の 24 時間支援を「一つの事業」と表現したことである。ボランティアは断続的に例えば年に数回という形でするからこそ、くたびれずに続けられるが、黒田氏の支援チームはそれを超えて 24 時間支援している。「一つの事業」であったからこそ 24 時間支援ができたし、あるいはちゃんとした「事業」であれば黒田氏が亡くなった後も芽が繋がったかもしれないと述べている。ボランティアをするにあたって、生真面目に使命感だけで支援を行っては継続的な活動には繋がらない。しかし、被災者にとっては継続的な支援も必要である。そうしたボランティアのあり方の難しさも ○氏から教えていただいた。

#### 1.5.3 看護師 (F氏) へのヒアリング調査

F氏は面瀬中学校区の仮設住宅で黒田氏とともに支援を行なった看護師の一人である。F氏が黒田氏の活動に参加するきっかけは、黒田氏が避難所での支援を手伝ってくれる地元の看護師を探しているという知人からの声掛けであった。その後、電話で黒田氏と話したが、その時の会話が黒田氏にとっての面接であったそうだ。F氏の「声を聴いただけで黒田さんは判断できるんですって」との言葉が印象的であった。その後 F氏は黒田氏と一緒に避難所と仮設住宅での活動をされた。F氏から伺った仮設住宅での黒田氏の活動は、さながら病院の一つの病棟のような一面がある印象を受けた。例えば、生活されている人の中で、疾患を持ったひとにはカルテを作成し、またその他にも訪問する必要がある方もピックアップされ、「ゴミ箱の中にも命がある」という観点でその人の生活をみて訪問する頻度も決定していたという。

また、看護師のボランティアや看護学生のボランティアを組織立てて、自分が不在の時には一日の報告を受け、その場にいなくても支援をする管理者の側面も見え隠れした。しかし、このような看護の専門職としての活動の側面もあれば、入院患者皆に平等に接するような病院の看護師の活動ではなかったという面もあったという。そこが、ボランティアという活動家としての側面であったのかもしれないとのことであった。F氏のお話を伺って、黒田氏の活動の根底は、「人間との向き合い方」ひいては「自分自身との向き合い方」であり、これは看護の在り方そのものだなと考えさせられた。

黒田氏が子ども達には「甘かった」というエピソードも印象的だった。欲しい物があると支援現場で出会った子どもが言うと、いっしょにタクシーに乗って買いに行ったとも言う。その子どもは、いま世界で一番じぶんが大切にされている、と感じただろうとおもう。買ってもらったものを得意げに抱きしめている姿を想像する。全体のバランスといったことを突き抜けた、差し向かいの個別固有の実存への献身には一種の宗教性があるかもしれない。 F氏は黒田氏と一度だけ時間を忘れて語りあったことがあったという。話題はナイチンゲールのことだったそうだ。

#### 注

- 1) 黒田氏が参加した特定非営利活動法人の呼称は「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」で、同氏の没後に宇都氏が引き継いで再出発した団体名は「阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク」である。
- 2) 新型コロナウイルス感染症の影響で 2020 年 3 月 3 日 (火) より人と防災未来センター が臨時休館となったため、以降の開催は行っていない。

# 第2章 仮設住宅での支援

#### 中平遥香(資料室 震災資料専門員)

#### 2.1 はじめに

1995年1月の阪神・淡路大震災に限らず、新潟県中越地震(2004年10月)、東日本大震災(2011年3月)、熊本地震(2016年4月)などの地震災害や、令和2年7月豪雨のような水害が発生した際にも、住宅に被害が及び人々の生活に支障をきたす状況になった際には、必ずといっていいほど仮設住宅が建設されている(表2-1)。

			_ · · · · ·
主な地震災害	全壊・半壊棟数	応急建設住宅	みなし仮設
阪神·淡路大震災	249,180 棟	48,300 戸	_
新潟県中越地震	17,982 棟	3,460 戸	_
東日本大震災	404,893 棟	42,951 戸	67,877 戸
熊本地震	43,386 棟	4,303 戸	14,923 戸

表 2-1 過去の地震災害の被害家屋棟数と仮設住宅戸数

注1:東日本大震災では、地元工務店仮設住宅も9,017戸建設された。

注2:みなし仮設の呼称で呼ばれるのは東日本大震災からであるためそれ以前の震災は空欄にしている。

一般的に「仮設住宅」とは、災害発生後に応急的に設置されるプレハブ住宅を指す。国や地方自治体などの行政主体が災害救助法に基づき設置し、被災者に貸与するもので、設置費用や賃料は国庫負担によってまかなわれる。みなし仮設住宅は、震災などで住居を失った被災者が、民間事業者の賃貸住宅を仮の住まいとして入居した場合に、その賃貸住宅を国や自治体が提供する「仮設住宅」(応急仮設住宅)に準じるものと見なすものである<sup>1)</sup>。応急建設住宅、みなし仮設住宅を合わせても過去の災害で多数の仮設住宅が建設された。

内閣府は、今後起こると予測されている「大規模災害の被害想定から算定した応急仮設住宅の必要量の推計」をホームページ上に掲載している<sup>2)</sup>。首都直下地震では、阪神・淡路大震災の約20倍、東日本大震災の約22倍、南海トラフ巨大地震では、阪神・淡路大震災の約42倍、東日本大震災の約48倍の仮設住宅が必要であると推計している(表2-2)。今後起こると予測されている大規模地震災害時には、過去の災害を超える仮設住宅が必要である。南海トラフ巨大地震に至っては、広域かつ都市部にも被害が及ぶと予測されているため、阪神・淡路大震災と東日本大震災の特質を兼ね備えた地震災害が起こるとされている。

また、応急仮設住宅の集会所は「住民による運営を原則」とする規定 ³となっているが、 具体的な運営方法の指針があるわけではなく、仮設住宅の集会所の運営のことを予測し取 り組みを行っている地域住民は少ない。なぜなら、仮設住宅にまさか自分が入居するはずが ない、ましてや運営まで任されるなんて、という「想定外」の出来事であるためだ。しかし 前述したように、①過去の災害では仮設住宅が建設され、②将来起こると予測されている南 海トラフ巨大地震では阪神・淡路大震災の約 42 倍、東日本大震災の約 48 倍の仮設住宅が必要であると予想されており、③応急仮設住宅の集会所は住民による運営を原則としていることなどが発表されている以上、我々が向き合うべき課題は既に提示されている。

表 2-2 大規模災害の被害想定から算定した 応急仮設住宅(応急借上住宅・応急建設住宅)の必要量の推計

	首都直下地震	南海トラフ巨大地震
全壊棟数	約 24 万~61 万棟	約 94 万~239 万棟
半壊棟数	約 67 万棟	約 169 万~276 万棟
全壊・半壊棟数	約91万~128万棟	約 270 万~500 万棟
全壊・半壊戸数	約 221 万~314 万戸	約 351 万~684 万戸
応急仮設住宅の想定必要量	約 66~94 万戸	約 105 万~205 万戸
応急借上住宅の供与可能戸数	約 86 万戸	約 121 万戸
応急建設住宅の必要戸数	約8万戸以内	約84万戸以内

注:内閣府ホームページ『防災情報のページ』「大規模災害時における被災者の住まいの確保策に関する 検討会」より転載。

そこで、本章では、阪神高齢者・障害者支援ネットワークを事例に「ふれあい訪問」について考察する。ふれあい訪問とは、仮設住宅 1 軒 1 軒をまわり、被災者のニーズを聞いたり、様子を伺ったりするために阪神高齢者・障害者支援ネットワークが震災当時に行っていた取り組みである。ふれあい訪問という取り組みを基礎とし、仮設住宅居住者のニーズや情報を収集し、必要な支援内容を考え支援していくなかで基盤となる重要な取り組みであり、その後の災害(東日本大震災など)時にも行われている。

西神第7仮設住宅の場合は、阪神高齢者・障害者支援ネットワークのような支援団体が入っての活動が可能であったが、今後の災害ではコロナ禍のような事態が発生した場合に、外部からの支援が非常に困難になる。そのような状況下も想定した際には、より地域住民の支援が必要となってくる。

#### 2.2 分析の目的と方法

仮設住宅生活のなかで大きな問題としてあげられるのが「孤独死」問題である。「孤独死」 に明確な定義はなく、ここでは「単身者で単独死された場合の累計」を定義とする。阪神・ 淡路大震災では 233 人 <sup>4)</sup>、東日本大震災では 243 人 <sup>5)</sup>、熊本地震では 31 人 <sup>6)</sup>もの孤独死が発 生し、阪神・淡路大震災から 25 年以上経った現在でも、仮設住宅での孤独死は深刻な問題 としてメディアなどでとりあげられている。阪神・淡路大震災時に一番規模の大きかった西 神第7 仮設住宅は、1,060 世帯が暮らす大規模な仮設住宅でありながら孤独死はたった 3 名 であったプ。

阪神高齢者・障害者支援ネットワークは、西神第7仮設住宅でボランティア活動を展開するにあたり、以下の3つの目的を持って支援を行っていた8)。

- ① 一人暮らしの高齢者を孤独死させない。
- ② 高齢者・障害者を寝たきりにさせない。
- ③ 仮設住宅を住みよい生活の場とするために、コミュニティづくりを図る。

目的のひとつとして、「孤独死させない」ことを信念に支援を行っており、その支援のひとつとして「ふれあい訪問」があげられる。

ふれあい訪問を実施することにより、「異常の早期発見ができ、一人の人としてのいのちを重んじることができる」と黒田氏は語っている%。黒田氏は、一人一人の生活を知ることで、普段と違った様子を察知し、被災者からの助けのサインを感じることで、孤独死を防ぐことができると考えた可能性がある。

2018 年 9 月に黒田裕子氏の資料が阪神高齢者・障がい者支援ネットワークから寄贈されたことは前述したが、どのような資料であるか改めて簡単に振り返りたい。寄贈資料は約200 点あり、大きく分けると以下の 5 つに分類することができる。

- ① 黒田氏の講義・講演依頼・記録関係資料
- ② 新聞切り抜き
- ③ 西神第7仮設住宅関係資料
- ④ 伊川谷工房 (デイサービスや仕事づくりの拠点) 関係資料
- ⑤ その他

以上のような多様な資料があるなかで、本章では③西神第7仮設住宅関係資料に着目し、 そのなかでも、ふれあい訪問で作成した「ふれあい訪問シート」を分析素材とする。仮設住 宅での孤独死を防ぐため、集会所での運営に関わる情報を得るための手段として、ふれあい 訪問が、具体的にどのようなルールにのっとり、どのような記録を残していたのかは、報告 書などにも記載を見出すことができず、関係者の経験にとどまっている。簡単な概要は知ら れているかもしれないが、今回、当時の資料を見返しながら、当時を振り返ることで、今後 の災害に活かせる教訓やノウハウを抽出するため、資料の考察を行う。

#### 2.3 ふれあい訪問シートとは

まず、資料「ふれあい訪問シート」について述べる。寄贈資料の中で、「ふれあい訪問シート」が含まれている資料は、ファイルや紐で綴じられた状態で4冊分存在している(写真 2-1)。

ふれあい訪問シートは、「ふれあい訪問カード」と「ふれあい訪問記録表」からなるもので、ふれあい訪問カードには、居住者1人につき1枚用意されている(図2-1)。まず、右上の四角で囲った部分を見てほしい。訪問曜日が記入されており、毎週何曜日に訪問に行くのかが決まっている。図2-1は、木曜日のところに丸印がされているため、毎週木曜日に訪問

を行っていたことが分かる。

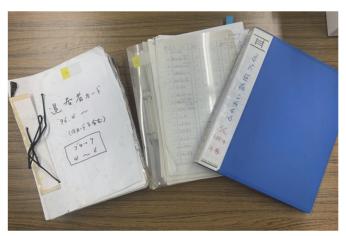


写真 2-1 **ふれあい訪問ファイル** 注: 人と防災未来センター所蔵資料

次は、世帯区分である。「老 障 母 独 生」と区分があるが、それぞれ、「老=老人」「障=障がい者」「母=母子家庭」「独=独居者」「生=生活保護」を表している。西神第7 仮設住宅は、1,060 戸、住民は当初1,500 人住んでおり、60 歳以上の住民がその9割を占めていたためこのような情報を収集する必要があったと考えられる。仮設住宅の特徴に即してこうした区分を設けて情報収集を行うことは、今後の災害時の支援においても有効であると考えられる。

さらに、要援護者の状況として、①健康状態・自立度、②医療機関、③家族状況・家族歴、 ④近隣・友人関係、⑤経済状態、⑥住環境、⑦制度・サービスの利用状況、⑧その他の項目 があり、それぞれ事細かに記入されている。この1枚を見れば入居者の状況が一目でわかる ようになっている。

図 2-1 の事例を見ると①健康状態・自立度の欄には、「足腰が痛い(立ったり、座ったり、 じゃり道を歩くのが大変)」とあるが、「炊事・洗濯・買い物、入浴は1人でできる」と記入 がある。仮設住宅とスーパーまでが遠く、買い物の際に送迎などのサービスがあったようだ が、それには及ばないことも記載されている。また②医療機関には、病院に月に1回通って いることが書かれており、通院頻度も把握できたことがわかる。

③家族状況・家族歴には記入がなく、世帯区分にも「独」の部分に丸がしてあるため一人暮らしであることが分かり、④近隣・友人関係を見ると、近所付き合いはかなり良好である。 緊急連絡先には姪の名前と連絡先が書かれており、何かあった時にはすぐ連絡がとれるようになっている。

⑤経済状態は、厚生年金で暮らしており、⑥住環境は、「階段を造ってほしい」「手すりを つけてほしい」など、足腰の痛さに起因すると考えられる要望が書かれている。また、

_		成7年 ク月 2分 [訪問曜日] 日・月・火・水・木・金・土/隔週~ オル おら い 書方 目引 カーー ド 担当者
西神	申中央 第	7 住宅 棟 号 世帯区分 老 障 母 独 生
氏	本 …	年齢 76 歳 性別 (女)・男 生年月日 大正 8年 1月 28 日
名	家	電話 以前の住所 東 麦白 区
	健康状態自立度	定腰が痛い(立ってこり、座ってこりじゃり道を歩くのか大変) 次本、決選、買い物、入浴は1人でできる
要	医療機関	住吉の病院 (月151日)
援	家族状况 家族歷	
護者	近隣・ 友人関係	74.7万種 4 4751 灰红.
43	経済状態	厚生耳金
0	住環境	P質校を造ってほいい、手すりをつけて(ましい) パラスが少なくて 道がドロドロだって、パラスを入れて参きやすくして(ましい) (95と 88のP引も)
状況	制度・サ 一ビスの 利用状況	社場・テレネン・サホート・(グ)
	その他	病院が中介. 支向の戸と南ける時かしろりかかる度しかるる 屋内のあずまれる人曲(4ヵ所)-ヨラヨが麻趣味:議曲
緊急	<b>急連絡先</b>	An. 078-
ケア内容	现-回 4/28 入層	一西でからった了をは一からてしまり。

図 2-1 ふれあい訪問カード

注:人と防災未来センター所蔵資料より転載。

仮設住	宅 ふれあい訪問 訪問記録表 氏名:	No	
月日	訪 問 内 容 ・ 結 果	担当者	
7/6	/200 おえ対でした。 さんとはなさくとうに	ig ac	
	おきなしていました。		
713.	月曜がてみ会いしたとまに体温かみゃつしかな		
	くて入る合のとまにフラッとしたりするのでるけん		
	あいセンターへ行って血圧を測ってもうかうと見		
	っていると話はれていたか、かき着さんに診		
	てもらったところ、十二脂腸潰瘍の凝いかある		
	ので胃かメラものむう定だか、恐して不安だと		
	言的43。 青胆/ウの手術を17113のでやの		
······	影響がも知れないとも、そのこと。		
120	お変的をリネセイスでした。		
727			
3/.6	お養かりなく方、方気でしてる。	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
3/	お愛山サインスラストー。	1.	
	からと言ってことめった。かめりにエコーをそってもらったか	·	
	異常はなかったとのこと。隣のこれて作さく		
• • • • • • • • • •	りならっている(海中のシップであるって方はでり、でも		
	又佐宅が当って一人になったらとうしょうと不安に思っている様る。		
347	ではるなる。 ・ ではへ下薬をもういにあったかける時にて度する		
	11 (71 to 5. 1/2 an) to 1 2/2 5.		
4/3	先園の 医院は11時年頃行,7診察か上時年	\.	
	くらいになったよう。いつも混んでいるようす。年を		
	取るとあちこち悪くなるのは普遍でで見らように	,	
	しているとか、部はいた。		

図 2-2 ふれあい訪問記録表

注:人と防災未来センター所蔵資料より転載。

外灯がなく夜家に帰るのが不安であることや、すきま風で家が寒いなど、仮設住宅の生活でのニーズが書き記されていることが多い。⑦制度・サービスの利用状況には、テレホンサポートを週1回利用しており、⑧その他には、病院の仲介、「玄関の戸を開ける時少し引っかかる感じがする」など、他の枠で書き切れなかった事項が記入されている。

次に、ふれあい訪問記録表である(図 2-2)。日付と訪問内容・結果、担当者を記入する欄があり、非常にシンプルである。訪問内容・結果はできるだけ簡潔に書かれており、1 枚で数か月の記録が記入されている場合もあり、前の記録も見返しやすいようになっている。担当者に関して黒田氏は、「1060 世帯を 6 つのブロックに分けて、1 ブロック毎に一般ボランティアを 2 名ずつ配置し、固定的に担当するという方式を採った。このような固定制方式は私が病院勤務をしている時に、ケアの資質を向上させ、継続ケアを図るために行った方法の一つである」と述べている 100。実際にふれあい訪問記録表を見ると、出来るだけ同じメンバーが引継ぎ、訪問していることがわかる。

同じメンバーが訪問するにしても 1,060 世帯もの仮設住宅を支援するにあたって、ボランティアはどのようなことに気をつけていたのだろうか。それは、「ふれあい訪問マニュアル」を見るとみえてくる(図 2-3)。マニュアルは、A4 用紙 3 枚にわたって綴られている  $^{11}$ )。

まず、ふれあい訪問に来たボランティアだということが分かるように、名札をつける。また、訪問したボランティアが対応できない自発事項を予測して、原則としてボランティア2人1組で訪問することや、ドアを2~3度ノックし、「ふれあいテントのボランティアの〇〇××です。安否確認にきました。」と自分の身分を告げる。一度で出てこなければあと2回程、同上の言葉とノックを繰り返す。注意事項として、「この時に必ず数件先まで聞こえるような大きな声で声掛けする。」と書かれている。それは、もし安否先の住民が留守でも、何かしらの形でコミュニケーションがとれていれば、両隣や近所の住民から情報提供がされる場合が多いからである。

なかなか住民が出てこない場合でも、訪問の際に、足腰が弱い、耳が遠い、高齢者である といった情報があれば、ドアをノックしたり、少し時間を置いて待ってみたりなど、対応を 変えるよう記述がある。

住民が、訪問時に不在の場合でも入居者の日々の様子は観察することができる。郵便受け や電気メーター・水道メーターを確認し、動いている形跡の確認のために安否調査の用紙の メーターチェック表 (別途) に記載する。以後、所在が確認されるまでメーター表の記載を 続ける。数回訪問しても留守の場合には、室外に出されている洗濯機、靴、自転車等の位置 を図で表すようにする。移動があればその都度記載するなど、普段と変わったことがないか を観察するように指示している。

在宅の場合は、安否確認の趣旨を伝え、協力してもらえるか話す。決して無理強いはせずに、協力的な態度であれば安否確認調査を開始する。ただし、マナーとしていきなり年齢や電話番号、家族構成などを聞くと失礼にあたるため、あたりさわりのない項目(健康状況や入居してから困っていることの有無)などから質問するように注意事項が記載されている。

# 持ち出し厳禁

1500039-062006

#### ふれあい訪問マニュアル

平成7年9月20日

#### ふれあい訪問の方法

- 1 · ふれあいテント○○××の名札を必ず相手の見える位置(胸元など)に着ける。
- 2・原則として2人一組のペアで調査を行う。(対応できない突発事項を予測して)
- 3・相手(安否をする住宅)のドアを2~3度ノックする。

自分の身分(名前)を告げる。

「ふれあいテントのボランティアの○○××です。安否確認に来ました。」 1度で出てこなければあと2回程、同上の言葉とノックを繰り返す。 この時に必ず数件先まで聞こえるような大きな声で声掛けする。何故ならば、もし

この時に必ず数件先まで聞こえるような大きな声で声掛けする。何故ならば、もしかしたら安否先の住民が留守でも何かしらの形でコミュニケーションがとれていれば両隣の住民はもとより、近所の住民から情報提供がされる場合が多い。

4 · 玄関で数回声をかけても不在の場合、裏口にまわり窓からノックして声を掛けるようにする。

(高齢者や身体障害者では座位から立ち上がるまでに非常に時間が掛かる。さらに 伝い歩きなどしながらでは玄関まで来るのに数分かかることがあるので玄関から裏 口にまわって訪問する場合すぐに移動するのではなく、以上のようなことを考慮の うえに裏口にまわるようにする。

5・①・4でも不在の時、鍵がかかっているか否かを確認。

第7仮設住宅の場合、鍵の種類は3種類ある。

(室内からかけてある鍵か、外からかけてある鍵かがわかるものが2種類あるのでなず確認する。)

②・鍵がかかっている場合で住宅供給公社などから不在を知らせる紙が玄関に貼っ てあるか確認する。

貼ってある場合、日付がいつになっているかを確認する。

③・郵便受けを確認する。

ダイレクト・メールの他にガス・水道・電気代の光熱費等の請求背、又は振り込み傾収潜がないか適認する。

(これらの重要郵便物のほうが遠遠がちな薄っぺらな封書で届く場合が多い。) あった場合、差し出された日付を確認する。

①・電気メーター・水道メーターを確認する。

動いている形跡の確認のために安否調査の用紙にメーターチェック表(別添)に 記載する。

以後、所在が確認されるまでメーター表の記載を続ける。

6・数回訪問しても留守の時には室外に出されている洗濯機、靴、自転車等の位置を、

### 図 2-3 ふれあい訪問マニュアル (一部分)

注:人と防災未来センター所蔵資料より転載。

住環境に対する事項は、自治会の会長、副会長、各棟の連絡委員に住民自ら連絡してもらい、以後の判断を仰ぐようにしてもらう。健康面に関しては、医療者サイドで判断すべき場合、家事援助などのホームヘルパーの申し込みや、生活保障の申し込みの依頼で保健所や区役所の福祉課などを利用する場合、つまり、ボランティアでは判断できない事例に関しては、まずは仮設住宅の担当者に相談するよう記載がある。

住宅内にあがって欲しいと言われた際には、様々な話を聞いて欲しいことが多いので、そのまま素直にあがらせてもらう。生活環境は本人が満足していたとしても、実は何かしらの生活援助が必要になるのではないか、相手に気付かれないように観察する。例えば、入居者の着ているものが1週間以上替えてないような洋服でないか、部屋の掃除が行き届いているか、台所にカップラーメンやレトルト食品のゴミばかりがないかなどもチェックするよう記載がある。これは、支援が必要か質問した際に「大丈夫」という被災者がほとんどだそ

うで、私生活から被災者の発しているサインを見逃さないようにという配慮が感じられる。 では、マニュアルを基にして実際に記録表にボランティアが記入している事項を見てい く。図 2-4 は、住居にあがらせてもらった時の訪問だろう。「何を食べているか見えず、窓 を開けていないので部屋の中くさい臭いする」というように、訪問に行くことで感じる臭い についての記載がある。

10/6	13-40 「今.病院から帰てきたほかりで、固食を はずる明と言え
	13-40 「今、病院的情况于一日的了了一个食品。人们的明显了
	ているいので、野屋の中くてい臭、する、目玩賞変みとのる、今は人生に死
	10/12に労災がでると言われる、かをなに使りなないるし

図 2-4 臭いの異変に気付いた時の記録

注:人と防災未来センター所蔵資料より転載。

9/5	11:30 外鍵 留守 隣の こんのか第7-	
	ける気にしてらっしゃるとのこと。	

図 2-5 近隣住民との関係が分かる記録

注:人と防災未来センター所蔵資料より転載。

図 2-5 は、訪問先の住民は留守であったが、隣の家の方からの情報で、「元気にしている」ということが記録されている。また、それに加え、隣人との関係が良好であるということも分かる。訪問記録には、隣人や家族の交流があるかどうか、良好な関係が築けているかどうかの確認も記載されている。また、訪問時に仮設住宅内のふれあいテントで行っているふれあい喫茶に誘い、近隣住民との関係を築けるような仕掛けづくりも行っていた。ふれあい喫茶や近隣住民との交流が良好な場合は、訪問を終了したり、訪問の頻度を週 1 回から 2 週間に1度にしたりするなどし、工夫していることが記録から読み取れた。

	5/29	5、暖、貧、相変らす、最近は置っ針も1でもうって	
١	. , ,	113年う、湿布にかるでれてか中いそうて、葉を逢って	
		あり、た、家の中が競らかってリラようたが、掃除技	
		か使えないた、ろうから 環際に来てあげらうかと言うと	
		いるかいを言う、なかなか対応かしい、	,

図 2-6 対応が難しい住民とのやりとり

注:人と防災未来センター所蔵資料より転載。

図 2-6 は、マニュアルにもあったように、住民は「大丈夫」だと言っているが、部屋が散らかっているといった事例である。住民の変化に気づくのもボランティアの役目ではあるが、住民に無理強いすることもできない。そのため、ボランティアが困っている様子が「なかなか対応がむずかしい」という言葉に込められている。

#### 2.4 考察:黒田裕子氏が遺してくれた資料とは

以上のように、ふれあい訪問シートの記載内容には以下のような特徴がある。

- ①1日の記載内容は多くて10行ほどで、特記事項を簡潔に記載している。
- ②家族や友人、近隣住民との関係性を重視している。
- ③訪問不要の判断基準
  - (1) 引っ越し(新たな居住地に移った場合)
  - (2) 近隣住民との関わりがある場合
    - ⇒ふれあい喫茶への参加、留守でも近隣住民から話が聞ける場合などは訪問不要 としている。

ふれあい訪問シートから、マニュアルを基にボランティアが活動していたことが分かる。 黒田氏が語っていたように、ボランティアは「1060世帯を6つのブロックに分けて、1ブロック毎に一般ボランティアを2名ずつ配置し、固定的に担当するという方式」にしていた。このような固定制方式は、黒田氏が病院勤務をしている際に、ケアの資質を向上させ、継続ケアを図るために行った方法の一つであり、仮設住宅支援が長期的なものであることを見込み、看護師であった今までの経験を活かした支援から生まれた活動の手法である。

このように、黒田氏の寄贈資料は、阪神・淡路大震災時の仮設住宅支援活動のノウハウが残された貴重な資料であると位置づけることができる。ふれあい訪問シートやふれあい訪問マニュアルからは、黒田氏が看護師で培った経験やノウハウが詰まっており、仮設住宅支援活動で技として活かされている。また、今後起こると予測されている災害時に備えるために活用すべき資料である。西神第7仮設住宅で行われたふれあい訪問の手法というのは、1,000世帯以上ある仮設住宅でボランティアが一定のクオリティを保てるシステムとなっている。

災害の規模によって、仮設住宅の規模も居住者の特徴も変化する。西神第7仮設住宅は高齢者の居住が非常に多かったため、そのための支援が必要であった。また、現在のようなコロナ禍であれば支援の手が入らず、被災地に住んでいる者同士で支援活動をする事態も考えられる。紙幅の関係で、資料全てを紹介することはできなかったが、黒田氏の培ってきたノウハウを基に、今後の仮設住宅支援を考える際に基礎にして欲しい情報が少しでも記載できていたら幸いである。

注

- 1) 大水敏弘『実証・仮設住宅 東日本大震災の現場から』学芸出版者,2013.
- 2) 内閣府ホームページ『防災情報のページ』「大規模災害時における被災者の住まいの確保策に関する検討会」URL: http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h30/zuhyo/zuhyo1-02 07 01.html (取得: 2021年1月6日)
- 3) 災害救助実務研究会編:災害救助の運用と実務-平成 26 年度版-,第一法規株式会社, 2014, p.287.
- 4) 神戸市生活再建本部編『阪神・淡路大震災-神戸の生活再建・5 年の記録-』神戸市生 活再建本部、2000、p.141.
- 5) 「<震災6年>孤独死 被災3県243人」(河北新報2017年3月4日)
- 6) 「熊本地震「孤独死」31人に みなし仮設で新たに1人」(産経新聞 2019年7月31日)
- 7) たった1名であっても孤独死が出てしまったことは、黒田さんにとっても、阪神高齢者・ 障がい者支援ネットワークにとっても、命の重さには変わりはないと思うが、ここでは 阪神・淡路大震災で発生した孤独死の多さや西神第7仮設住宅の抱えていた居住世帯数 から考えてこの言葉を用いた。
- 8) 黒田裕子:阪神大震災を通じて自己の可能性を見つける一人と人とが向き合うなかでの 私,似田貝香門編:ボランティアが社会を変える一支え合いの実践知一,関西看護出版, 2006, p.38.
- 9) 前掲注 4, p.49.
- 10) 前掲注 5.
- 11) 紙幅の関係上、マニュアルの全てを掲載することは出来ないが、ポイントを押さえ、筆者が記述している内容でご理解いただきたい。

#### 3.1 はじめに

黒田裕子氏は1995年の阪神・淡路大震災発災当時、揺れの後すぐに宝塚市役所へ駆けつけ、災害対応にあたった。市役所に来た消防隊より「外傷や死人が多く出ており、市内の4つの病院だけでは機能が麻痺している。何とかしなくてはならない、まだまだ被災者と死者が出る」と聞いた時、総合体育館を活用することを思いついた。総合体育館を救護所として活用することで、病院の機能麻痺を緩和し一人でも多くの命を救うことを考えたり。そこでの活動は、指揮者を置き、運ばれてきた方のトリアージを行い、搬送する病院を選定し搬送するという、まさに現在の災害現場救護所と同様の機能を持っていた。黒田氏は「人の命を救う使命がある」ことを自覚し、その後も24時間体制で救護所と避難所となった総合体育館で看護師としての使命を持ち行動していた。ここから、黒田氏の半生をかけた支援と活動がはじまったのである。また、避難所では、人々の「暮らし」を守り「健康管理」に注力していた。24時間体制で被災者の傍らに寄り添う心から、避難所での「生活」を「暮らし」として捉えているのではないかと考えられる。暮らしの場での健康管理という視点から、避難所の環境づくりに重きをおいていた。この視点は、看護師としての保健衛生の考えが土台にあるとしても、さらにこれまでがん患者のホスピスや在宅ケアに携わってきた黒田氏だからこそ持てた視点と活動であると考えられる。

仮設住宅での生活が開始すると、仮設入居者の孤独死等の社会問題が発生している状況を受け、「ひとりの人として、命を重んじる」支援活動を看護師や一般ボランティアと行なった。それらの経験を踏まえ、黒田氏は「震災前に必要な支援が届いていなかった人、震災後に新たに支援を必要とする人、この人々が、今後「生ききる」ために、日常生活の中で、困ることがないように、ヘルパーの派遣団体、福祉関係、保健所、医療機関、訪問看護ステーションなどのネットワークをつくり、地域でのプログラムが、住民に反映されるよう、ひとりの「人間」として支援をしていきたい」と述べている<sup>2)</sup>。その後も新潟県中越地震や東日本大震災等でも精力的に支援活動を行っており、黒田氏の被災者支援は亡くなる 2014 年まで継続された。

黒田氏は、支援の経験・教訓から、一人ひとりを大切にするという姿勢で、福祉避難所の必要性を強く主張し、設置とその改善にも尽力した。また、看護師として、災害に備えた退院指導や、発災後初期の救護所活動から仮設住宅での災害関連死を防ぐ見守り支援に至るまで、後の災害看護のあり方に多大な影響をもたらした<sup>3)</sup>。

こうした背景をふまえると、今後起こり得る災害での被災者への医療や福祉分野の支援 を考える上で、黒田氏の経験や理念、被災者への関わり方などを検証・継承することは重要 である。

#### 3.2 分析の目的と方法

#### (1) 目的

本章では、今後起こり得る災害での医療や福祉分野の支援を検討するための基礎資料として、まず、黒田氏が重要と考える活動や理念を捉えることを目的とした。また、黒田氏は1995年の阪神・淡路大震災から亡くなる2014年まで継続して支援活動等を行なっているが、それらの活動内容や考え方がどのように変遷していったかを明らかにする。さらに、黒田氏は高齢社会への対応をはじめとする福祉的な被災者支援と、看護師としての退院指導や救護所活動、災害関連死を防ぐ見守り・健康管理等といった看護師の側面からの支援を行なっている。福祉的・看護的な視点から見た活動の内容や関係性も含めて考察する。

#### (2) 方法

黒田氏が執筆した文献または黒田氏が講演した内容を文字おこしされた文献を用いてテキストマイニング分析を行なった。

#### ①使用した文献

Cinii および NDL ONLINE より文献を検索し、43 件の文献を抽出した。そのうち、数行のみで構成されている抄録を除く 41 件の文献を用いることとした (表 3-1)。なお、2015 年に出版された文献が含まれているが、生前に執筆したものと判断し、分析対象に含めた。テキストマイニングを行うにあたって本文を段落ごとに分解したところ、1884 つの段落となった (表 3-2)。

表 3-1 文献数の内訳

1995 年~2000 年	5 件
2001年~2005年	13 件
2006年~2010年	14 件
2011年~2015年	9件
計	41 件

表 3-2 段落数の内訳

1995 年~2000 年	289
2001年~2005年	545
2006年~2010年	782
2011年~2015年	268
計	1,884

#### ②単語の抽出

テキストマイニング分析には KH Coder 3.Alpha.17L を用いた。

奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座(松本研究室)により開発された茶筌システムを用いて複合語を検出した後、品詞分解を行なった。50 語以上抽出された語は表 3-3 のとおりである。

名詞として、多く抽出されたのは「地域」「ケア」「災害」などである。サ変名詞では「活動」「生活」「支援」「看護」が多くなっている。名詞Bでは「いのち」が 50 語以上抽出された。名詞Cでは「人」が最も多く挙がっている。

表 3-3 50 語以上抽出された語

				70 0 00 H	->\ <u>-</u> -,	шш С 101	<b>-</b> HH				
名詞		サ変名詞		名詞C		動詞		形容動詞		副詞	
地域	553	活動	489	人	710	考える	365	必要	262	特に	53
ケア	297	生活	377	年	153	思う	296	大切	189		
災害	260	支援	216	心	129	行う	228	重要	143		
状況	226	看護	189	目	121	言う	226	さまざま	83	副詞B	
人々	213	展開	129	場	108	入る	144	安全	66	どう	110
社会	199	連携	128	家	97	行く	143	様々	60	さらに	77
病院	194	訪問	117	次	75	見る	140	健康	58	これから	75
コミュニティ	185	対応	111	声	75	出来る	133			しっかり	73
医療	181	関係	97	月	73	持つ	121			もう	71
自分	175	組織	92	手	62	出る	120	ナイ形容		とても	62
震災	171	提供	85	薬	59	生きる	99	問題	152		
団体	164	仮設	84			向ける	88				
家族	147	介護	82			受ける	87			副詞可能	
住民	144	実践	80	タグ		来る	86	形容詞		今	184
福祉	139	構築	72	仮設住宅	359	向き合う	83	多い	177	場合	138
情報	130	相談	71	ボランティア	346	作る	68	大きい	67	時間	116
状態	128	施設	70	避難所	313	住む	68			多く	100
行政	124	変化	68	高齢者	255	図る	66			前	61
人間	112	電話	64	患者	148	置く	64	形容詞B		今後	59
環境	102	入院	61	被災者	139	支える	63	ない	230	日々	57
筆者	99	搬送	60	阪神・淡路大震災	128	感じる	62	よい	51		
ニーズ	98	在宅	59	看護師	116	見える	60				
市民	94	一緒	58	地域社会	77	取り組む	53				
視点	90	行動	58	自治会	76	話す	52	形容詞(非	自立)		
医師	82	サービス	56	被災地	73	聞く	51	よい	54		
言葉	81	安心	56	障害者	67						
地震	79	存在	56	介護保険	56						
ネットワーク	68	避難	56	グループハウス	55	動詞B		否定助動詞	司		
体制	66	意味	55	救護センター	52	する	4149	ない	1281		
被害	64	被災	55	孤独死	51	なる	892	ぬ	133		
高齢	63	配慮	52			ある	819	ん	126		
精神	61	予防	51			できる	589				
住宅	60	機能	50	地名		いう	254				
あり方	59	入居	50	神戸	67	いる	222				
現状	58			日本	64	わかる	104				
暮らし	58					よる	92				
相手	56	名詞B				やる	91				
お互い	55	いのち	107	未知語		にる	71				
センター	55			NPO	156	つくる	63				
苦痛	55					でる	58				
ナース	54					とる	57				
課題	53										
体育館	53										
役割	52										
子ども	51										

#### 3.3 分析結果

#### (1) 全体を通した活動や理念

41 件の文献を用いて、1,884 つの段落からテキストマイニングを行ない、上位 100 語を用いた共起ネットワークを示したのが図 3-1 である。使用した品詞は「名詞」「サ変名詞」「名詞 B」「名詞 C」「地名」「未知語」「タグ」「形容動詞」「組織名」「動詞」「形容詞」である。

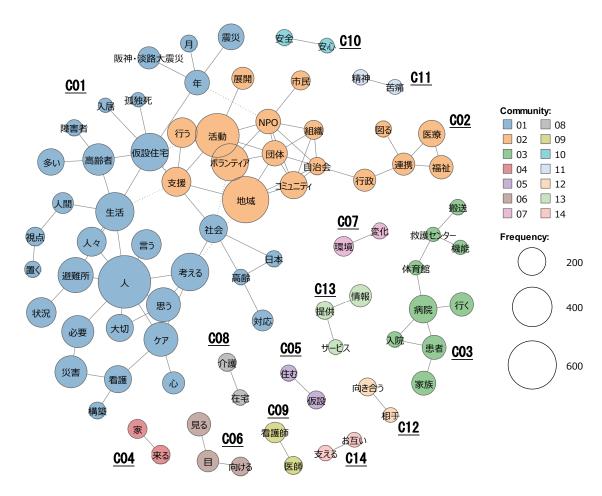


図 3-1 全体を通した活動や理念

「人」と「地域」が他の語に比べ多く出現している。仮設住宅での「人の生活」と「地域 への支援活動」を主軸に活動が展開されていたことが伺える。

Community01では、①阪神・淡路大震災の際は、仮設住宅において高齢者や障害者が多数生活しており、孤独死が問題となっていたこと、②日本の高齢社会への対応を考慮する必要があったこと、③人間の生活に視点を置くことが大切であること、④災害看護を構築し、「一人ひとりの人」を大切にした看護、そして「心のケア」が必要であること等が伺える。

Community02 では、①NPO 団体やボランティアによる活動を展開し、地域コミュニティづくりの支援を行うこと、②それにあたっては、自治会と連携しながらすすめること、③行

政・保健師・民生委員・自治会等と連携を図りながら、医療と福祉の連携による支援を実施する必要があることが読み取れる。

Community03では、①体育館に救護センターを設置したこと、②患者と家族の関係(例えば、患者のケアと同時に家族のケアも必要であることや、患者だけでなく家族へ指導することも重要であること、患者と家族とのコーディネーターを看護師が担うことなど)について述べられている。

Community04 は文書を見返すと「ある方が私たち(ボランティア団体)の場に来られなかったら、家に見に行ってもらい、様子を聞いてきます」といった内容が含まれており、仮設住宅や復興住宅において、安否確認のために家を訪問していることが示されている。

Community05は「仮設住宅に住んでいる」という状況を示している。

Community06 は「目を見る」「目を向ける」という、黒田氏が大切にしている支援をする際の姿勢が表れている。

Community07 は震災によって「環境が変化」している状況に黒田氏が注目していると読み取れる。また、Community08~Community11 に示されているとおり、「在宅介護」「看護師と医師」「安全・安心」「精神的な苦痛」についても多く述べられている。

Community12 は「相手と向き合う」という支援をする際の姿勢、Community13 は「サービスと情報の提供」という支援の内容、Community14 は「お互いに支えあう」という仕組みの必要性が伺える。

#### (2) 1995 年~2000 年の活動や理念

1995 年から 2000 年までの文献 5 件を抽出し、289 つの段落からテキストマイニングを行ない、上位 100 語を用いた共起ネットワークを示したのが図 3-2 である。

「人」「仮設住宅」が頻出している。一方、全体(1995年~2015年通して)で多くなっている「地域」は上位100位には入っているものの、それほど多くは出現していないことが注目される。

Community01 では「高齢者や障害者が多く住む西神第 7 仮設住宅でのボランティア活動を展開した」ことが読み取れる。また、その活動は「ひとりの人として、命を重んじる」ことを大切にしていたことも述べられている。

Community02 は「一人暮らしの高齢者を孤独死させないことを目的」にコミュニティづくりを図っていったことが伺える。

Community03 はニーズに合わせた訪問や、情報・サービスの提供を行なったことが示されている。

Community04 は公営住宅で新たなコミュニティづくり活動等を行政とともに行なったことが文章から読み取れた。

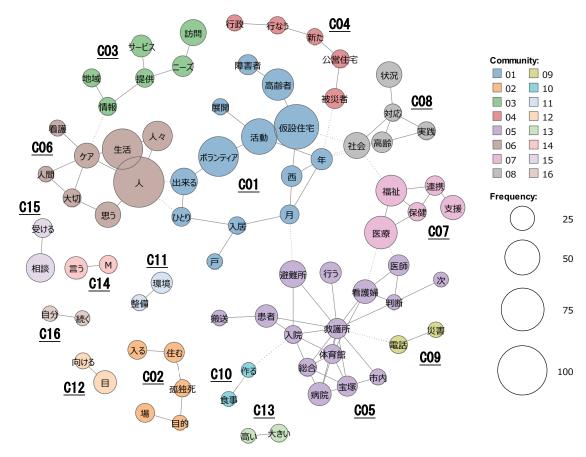


図 3-2 1995 年~2000 年の活動や理念

Community05 は総合体育館で開設した救護所から医師と看護婦が即座に判断して重症の 患者を宝塚市民病院へ搬送した状況が述べられている。

Community06では「人間らしい生のあり方のケア」を大切にする、「生活者としての人間に対する十分なケア」をしなければならないなど、一人ひとりに向き合ったケアを行う重要性を指摘している。

Community07では「医療・保健・福祉が連携して支援する」ことを強調しているのが表れている。

Community08 は高齢社会に対応した実践を仮設住宅で取り組んだことが述べられている。 Community09 は黒田氏が発災後すぐに市役所に駆け付け、電話応対をしていたことが表れている。

Community10 は食事を作れない被災者について述べられた文書が多く見受けられた。それに関連して、配慮された食事や適切な介護サービスの重要性、被災者の生活に目を向けた病院での食事指導の必要性について述べられている。

Community11 は仮設住宅での「環境の整備」を通して「住宅とは」「人が生活するとは」 ということを考えさせられたといった文書が多くみられた。 Community12 は「目を向ける」といった表現が多く使われていることが表れている。ただし、目を向けるのは「その場での問題に『目を向ける』」「母親は妹の方にだけ『目を向け』 ていた」「多くの方へ『目を向ける』」「「衣・食・住」医療全般に『目を向ける』」など多岐にわたる。

Community13 は、仮設住宅の棟番号を「目の高さの位置に大きい字を記す」という改善を ボランティアで行なったという経験談が述べられていた。

Community14は、M氏(独居の男性)の事例の紹介を多数していることが伺える。

Community15 は、なんでも相談コーナーを設けて、医療相談、福祉相談、生活相談など受けていたことを示している。

Community16 は、同じ建物の並ぶ仮設住宅の中で自分の家が分からず野宿をして危機一 髪命を救った例を紹介しつつ、そのような状況が続けば老人は脱水症状となり死の過程を たどることとなる可能性があったことを伝えている文書が多く見受けられた。

以上のように 1995 年から 2000 年における文献からは、事例紹介やボランティアとして 行なったことを中心に報告している文書が多く見受けられた。

#### (3) 2001 年~2005 年の活動や理念

2001 年から 2005 年までの文献 13 件を抽出し、545 つの段落からテキストマイニングを 行ない、上位 100 語を用いた共起ネットワークを示したのが図 3-3 である。

1995年から2000年の文献では、「人」「仮設住宅」が頻出しており「地域」はそれほど多くはなかったが、2001年から2005年では「活動」「地域」「人」の順に頻出している。

Community01 では阪神・淡路大震災の教訓をもとに、平時からの市民活動の活性化の重要性を指摘するとともに、しみん基金・KOBE にも熱心に取り組んでいたことが伺える。

Community02 は、看護師として患者や家族への向き合う大切さを示唆している。また、仮設住宅で病院とは違った暮らしを目の当たりにした黒田氏が仮設住宅でのボランティアを決意した経緯も文書では述べられている。

Community03 は、地域コミュニティの核となる自治会、町内会などの地縁組織を中心に、NPO やボランティア団体、行政が良い関係性を構築していくことが重要であることが伺える。

Community04 は、長期化する避難所生活への被災者支援の必要性が述べられている。例えば、抵抗力の低下しやすい高齢者や傷病者、乳幼児等が共同生活を強いられている状況の改善や、高血圧、呼吸器疾患、糖尿病等への健康チェック、睡眠障害、感情障害、アルコール依存、PTSD等による心のケア等が挙げられている。

Community05 は、救護センターから医療機関への傷病者の搬送体制について、教訓をもとに述べられている。

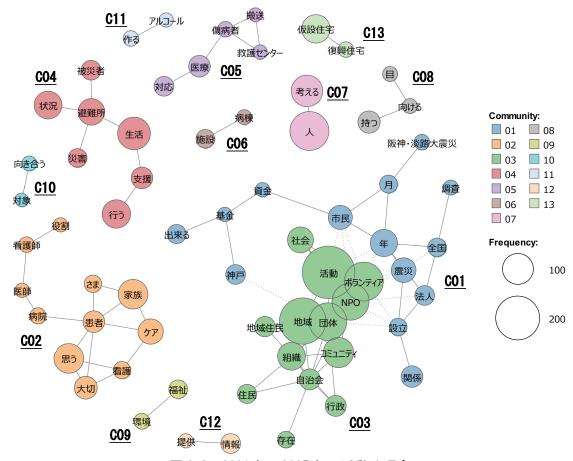


図 3-3 2001 年~2005 年の活動や理念

Community06 は、黒田氏のもう一つのライフワークであった終末期のホスピス・緩和ケアについて、病棟での対応のあり方について指摘している文書がみられた。

Community07は「その人を尊重したケアのあり方を考える」「ooの人たちをどうするのかということについて考えさせられた」など、一人ひとりに目を向けて考える様子が文書から伺えた。

Community08 は、障害や病を持つ人など一人ひとりの暮らしや生活に目を向けることの大切さを示唆している。

Community09 は、文書を見ると、地縁組織は防犯、福祉、子育て、環境など身近なテーマで活動しており、それらの活動を整理し、地域の意思を一つにまとめ、地域自治組織として活動の効果を高めようとしている自治体があることを紹介している。

Community10は、対象と向き合って支援をすることの大切さを示している。

Community11 はアルコール依存症の方に料理の作り方を教えたり、積極的にコミュニティを作ることで生きがいを生み出すなどの工夫をしたことを述べている。

Community12 は情報交換や情報提供を希望する声が多かったことからボランティアで行なった事例が挙げられている。

Community13 は仮設住宅から復興住宅への移行の難しさについて述べられている。 1995 年から 2000 年までの文献と比べると、阪神・淡路大震災の経験を踏まえた、平時からのコミュニティ形成に関する内容が多く挙げられている。

#### (4) 2006 年~2010 年の活動や理念

2006 年から 2010 年までの文献 14 件を抽出し、782 つの段落からテキストマイニングを 行ない、上位 100 語を用いた共起ネットワークを示したのが図 3-4 である。

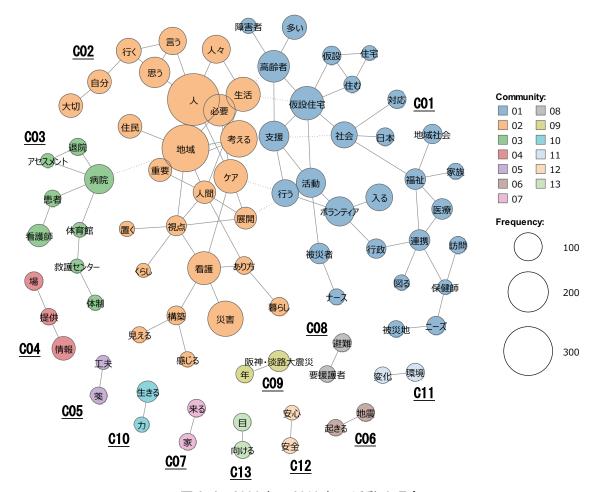


図 3-4 2006 年~2010 年の活動や理念

類出語として「人」「地域」が挙げられるのは 2001 年から 2005 年と同様であるが、その 2 つの語が繋がっていることに特徴がある。

Community01 は、①高齢者や障害者が多く住まう高齢社会を先取りした仮設住宅での対応であることを念頭にボランティア活動が行われていること、②行政、保健師等と連携を図りながら、医療と福祉の連携による支援を実施する必要があることが読み取れる。

Community02 は地域での人の生活や暮らしに視点を置いた災害看護を構築して行く必要性が伺える。

Community03 は看護師として体育館での救護センターの体制構築や病院での退院指導において患者と向き合うことが述べられており、それらは「地域」という語と繋がっていることから病院や救護センター内での状況にとどまらず、患者が退院して地域の暮らしに戻るという視点をもって行うことが重要であることが示唆される。

その他、情報提供の場(Community04)、薬の管理の工夫(Community05)、地震が起きた時の対応(Community06)、姿が見られない時の家への訪問(Community07)、要援護者の避難(Community08)、阪神・淡路大震災の年(Community09)、生きる力(Community10)、環境の変化(Community11)、安全・安心(Community12)、目を向ける(Community13)といったキーワードが挙げられた。

#### (5) 2011 年~2015 年の活動や理念

2011 年から 2015 年までの文献 9 件を抽出し、268 つの段落からテキストマイニングを行ない、上位 100 語を用いた共起ネットワークを示したのが図 3-5 である。

全体をみると 2006 年から 2010 年と大きく違って捉えられるものは、「要介護者」「介護」「介護保険」の用語である。これは、阪神・淡路大震災から 2 年後の 1997 年に公布された「介護保険法」と「介護保険制度」による社会的な背景がある。これまで病院や施設で看護や介護を受けていた方々が、在宅で継続した看護や介護を受けられるように、徐々に社会資源と呼ばれる「介護保険」「訪問看護」等の公的制度やサービスが整えられてきた。この間に起こった 2011 年に発生した東日本大震災は、被害が広域で甚大であっただけでなく、被災者の背景が前述した社会的背景によりこれまでとも異なっていた。これにより黒田氏の活動範囲や理念に影響を及ぼしたと推測される。

また、頻出している語は「人」「避難所」「ケア」等である。「地域」も出現しているものの、阪神・淡路大震災後の約5年間と同様でその頻度はやや低い。このことから、災害対応をしている時期は、目の前の「人」を大切に対応し、平時は地域コミュニティの形成や体制の構築にも注力していたことが伺える。

Community01 は避難所に来た被災者への対応と、避難所に行くこともなく家で生活している被災者への対応について述べられている。特に Community09 にある通り、家が無事であった在宅の被災者への支援にも注力している点が阪神・淡路大震災時の対応とは異なる。

Community02 の「いのち」が特徴的であり、文書をみると「一人の人としてのいのちを重んじる」という文が多用されている。Community06 にあるように、地震によって津波が発生し、多大な被害が出た中で、地域の枠を超えた支援体制の構築の必要性が浮かび上がっている。

Community03 では、相手と向き合い、どんな言葉でも聞く大切さを述べている一方で、言

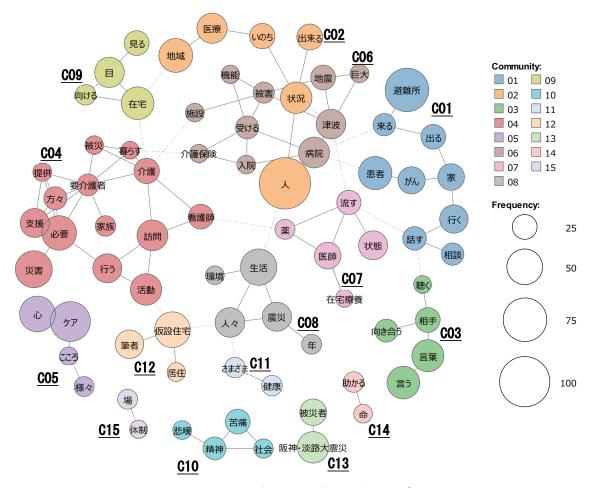


図 3-5 2011 年~2015 年の活動や理念

葉では言い表せない、裏にあるニーズを把握する力も必要である(それは、1つひとつのしぐさ、表情、音などからその人のいまを捉えるということ)とも述べている。

Community04 は要介護者や家族への支援の必要性、医師・看護師・ヘルパーたちが訪問することが重要であることが示唆されている。

Community05 は心のケアについて示している。

Community07 は津波で車等が流された状態で、在宅医療・在宅療養が困難であった状況を 説明している。

Community08 では災害が発生すると生活環境が一変する状況を示しており、Community11 のとおり、さまざまな健康問題を気にとめていることの重要性を強調している。

Community10 は社会的苦痛、精神的苦痛などの悲嘆があることを示しており、その人の生きる気力、対人関係が途絶えてしまうと自殺に繋がる可能性を指摘している。

黒田氏は阪神・淡路大震災の経験を踏まえて (Community13)、仮設住宅の中に拠点を置きサポートセンターを構築している (Community12)。そういった体制づくりや場の提供 (Community15)を基軸に「一人の人としてのいのちを重んじる」被災者支援を行っていた。

#### (6) 年代別の特徴語

4つの年代ごとの特徴語を示したのが表 3-4 である。

1995年から2000年では「仮設住宅」「生活」「ボランティア」等が挙がっている。この時期はボランティアとして、また、看護師として出来ることを手探りしながら仮設住宅での被災者支援を行っているものと思われる。「医療」「福祉」も挙がっており、支援活動の経験から、それらが連携する必要性を強く感じた時期であるともいえる。

2001 年から 2005 年では「活動」「ボランティア」「NPO」「地域」といった語句が挙がっている。仮設住宅が縮小し、復興住宅へ被災者が移行していく中で、地域の中でのコミュニティ活動に着目した時期であることがわかる。また、ボランティア団体や NPO の組織化にも注力している。

2006 年から 2010 年では「人」「地域」「考える」「災害」「支援」等が挙がっている。地域の中での暮らしや、これまでの支援活動の経験を踏まえ、災害看護のあり方が確立してくる時期であると考えられる。

2011 年から 2015 年では「心」「大切」「津波」「避難所」「在宅」等が挙がっている。阪神・淡路大震災とは津波の被害という点で大きく異なるが、津波によって被災し避難所で生活している被災者の他に、家が無事で在宅で生活している被災者にも目を向けて支援をしていることが伺える。その際、「人」を大切にしている点は初期から大きく変わらない。この「人」に焦点をあてると、1995 年から 2000 年では、「人々」として挙がっている。しかし、その後の 2006 年から 2015 年では、「人」として挙がっている。当初より「人」を大切にしているが、それはコミュニティにおられる「人々」とさらに「一人ひとりの人」として活動することを大切にしていることがわかる。

1995-2000	)	2001-200	05	2006-	2010	2011-2015	
仮設住宅	.110	活動	.214	人	.200	心	.115
生活	.102	ボランティア	.170	地域	.174	大切	.113
ボランティア	.100	NPO	.162	考える	.144	津波	.108
医療	.092	地域	.162	災害	.132	避難所	.106
福祉	.086	団体	.145	支援	.114	在宅	.102
高齢者	.080	コミュニティ	.121	ケア	.111	人	.102
人々	.076	行う	.112	必要	.109	思う	.100
看護婦	.070	状況	.092	看護	.108	災害	.100
多い	.069	組織	.092	高齢者	.102	考える	.098
相談	.066	社会	.088	避難所	.097	阪神·淡路大震災	.097

表 3-4 特徴語

#### 3.4 考察:福祉的な被災者支援と災害看護

#### (1) 黒田氏の活動や考え方の変遷

黒田氏は阪神・淡路大震災から亡くなるまで「一人ひとりの人」を大切に、支援活動を行っている。それは、看護師としてもともと備わっていた考え方であり、黒田氏の支援活動の

原点ともいえると考えられる。一方で、病院での看護やがん患者の在宅ケアを行なっていた 黒田氏にとって、阪神・淡路大震災が避難所や仮設住宅さらには地域の中での暮らしに対し て改めて着目する大きなきっかけになったと思われる。

2000 年から 2010 年にかけての文献をみると「地域」という語句が頻出しており、阪神・淡路大震災で行なっていた支援活動から平時の取組としてのあり方を探っている様子が伺える。在宅での生活における健康の維持やコミュニティの形成に特に注力しているが、その頃、高齢者福祉の観点からも「地域包括ケアシステム」が推進されており、黒田氏の支援活動は看護の側面から地域包括ケアシステムに取り組んでいるようにも読み取れる。従来から大切にしていた「人」を見るということに合わせて、「地域」の中で暮らすことに着目し、2006 年から 2010 年の文献では、その 2 つの語が繋がっていることに特徴があった。またこの年代では、地域のみならず地域社会や社会も挙がっており、行政、保健師等と連携を図りながら、医療と福祉の連携による支援の必要性が示唆された。これは、災害時には地域にある社会資源がうまく機能されないことに対して、これらの社会資源を活用するための連携を重視していたとも考えられる。黒田氏は、災害時に社会資源をどのように活用するかを決めるために、コーディネーターが必要であり、その働きによって、被災者の生活が大きく左右されることを述べている 4。言及はできないものの、この連携のコーディネーターの役割を、ボランティアや被災者に寄り添うナースに見出していたようにも考えられる。

そして、2011年から2015年では阪神・淡路大震災を踏まえつつ、東日本大震災での新たな課題についても明らかにしている。それは、これまで以上に地域で暮らす要介護者の方々が増加していたことである。そのため、東日本大震災では、在宅のみならず避難所にも介護を必要とする方々も多く避難されていた状況であった。また、家を失わなかった被災者が避難所に行くことなく在宅で生活をしている状況下での介護や健康管理、心のケアについて述べられている。このように、さまざまな体制が構築されつつある中でも、見逃される在宅の被災者へ目を向け、助かった命を失わない支援を行なおうとしていたことが伺える。これらの在宅への支援活動の変化は、介護保険制度による社会的な背景が影響を与えたと考える。しかしそれは、ごく自然な活動の変化とも考える。なぜなら支援の根本にある「一人ひとりの人」をみることを、看護師の頃から一貫しているからである。そのため、支援や看護を必要とする方が自宅におられるのであれば、被災した社会での社会サービスが機能しそこに繋げるまでは、看護師が地域に出て訪問する活動や、社会資源との調整役を担うことを求めていたとも考えられる。

#### (2) 黒田氏の活動の特徴

黒田氏の全体を通した活動や理念の共起ネットワーク(図 3-1)の Community02 では、① NPO 団体やボランティアによる活動を展開し、地域コミュニティづくりの支援を行うこと、②それにあたっては、自治会と連携しながらすすめること、③行政・保健師・民生委員・自治会などと連携を図りながら、医療と福祉の連携による支援を実施する必要があることが

読み取れた。これらは、福祉のまちづくりのための要素とも考える。例えば黒田氏が行った、仮設住宅での健康管理に始まり、保健師や生活保護担当の行政との橋渡し、グループハウスの設立、お茶会等各種イベントの開催など看護にとどまらない積極的な活動を行っていたことである。これらの活動は、健康づくりやその人らしく生きるための支援を受ける環境を整え、また他者とふれあい活動することでの生きがいに繋がる。まさに、福祉のまちづくりそのものと思われる。またこの活動は、その人への看護だけではなく、その人がその人らしく生きられる地域コミュニティをボランティアとして行った活動である。看護や保健師等の専門職、民生委員や自治会、行政がこのまちづくりの要素であり、それをコーディネートするのが NPO 団体やボランティアであることを示唆しているとも捉えられる。また、2001年から 2005年までの共起ネットワーク(図 3-3)の Community03では、地域コミュニティの核となる自治会、町内会などの地縁組織を中心に、NPO やボランティア団体、行政が良い関係性を構築していくことが重要であることが伺えた。このことから、地域コミュニティづくりひいては福祉のまちづくりは、黒田氏の活動の特徴の一つであるといえる。

さらに黒田氏の活動には、看護師であることだけでなく、病院の副看護婦長をされていた ことが影響している。詰まるところ熟練の看護実践者であり、また管理者であったことであ る。

1995 年から 2000 年の活動や理念の共起ネットワーク(図 3-2)では、Community05 は総合体育館で開設した救護所から医師と看護婦が即座に判断し重症の患者を宝塚市民病院へ搬送した状況が述べられている。また、2006 年から 2010 年の共起ネットワーク(図 3-4)の Community03 は、看護師として体育館での救護センターの体制構築や病院での退院指導において患者と向き合うことが述べられており、それらは「地域」という語と繋がっていることから病院や救護センター内での状況にとどまらず、患者が退院して地域の暮らしに戻るという視点をもって行うことが重要であることが示唆される。阪神・淡路大震災当時救護センター(救護所)を総合体育館に責任者として設置し、重傷者・中等症者・軽症者・霊安室と 4 つの部門を設置しシステマティックな運営を展開した 5。その後 NPO 法人阪神高齢者・障害者支援ネットワークを立ち上げ、東日本大震災での活動でも、地域の中でのコミュニティ活動に着目しボランティア団体や NPO の組織化にも注力していた。これらの活動は、看護管理者としての実践を経てきた黒田氏だからこそ組織だってできた活動と考える。

そして、全体を通した活動や理念(図 3-1)からも、看護師の視点として「一人ひとりの人」を中心に、そのかたのくらしの場となる「病院」「避難所」「仮設住宅」「地域」へ目を向けていた。そのうえで、それぞれのくらしの場を支えるために、医療・福祉・行政・地域が連携した社会を築き、「一人ひとりの人」を支援する活動に発展していったと考える。

#### (3) 福祉/看護の関係

前述した事柄から、黒田氏の活動を福祉と看護の関係から考察する。

黒田氏にとって、看護師として「一人ひとりの人」のくらしを大切に活動することが、そ

の人らしくいきることができる「地域」づくりとして福祉のまちづくりに繋がる活動になることはごく自然な展開なのかもしれない。その活動に必要なのが、医療関係者の専門職である看護師や保健師であり、行政である。しかし、これら専門職だけでは埋められない溝は必ず出てくる。その溝ができないようにするためにコーディネートする人が必要であり、それが NPO 等のボランティアや地域に活動の場をひろげる看護師であることを示唆していると考える。「一人ひとりの人」を活動の基軸にしている黒田氏にとっては、「看護」と「福祉」を切り離してはおらず、「看護」や「福祉」は「一人ひとりの人」のくらしを支援するための一要素なのであろう。黒田氏は、一人の人としてのいのちとくらしを守り続けることや最後の1人までも大切にされる社会を作っていくことが必要50と述べている。

また一方で、高齢者・障害者が豊かな在宅生活を送り、共に生きることができるように支援するためには、「我々看護婦も「医療と福祉」の視点に目を向けることが重要である」のと、看護師の立場で看護師へ提言している。これは、「災害看護」の枠を超えた「看護」の在り方の一つを提言しているとも捉えられる。黒田氏はこれまでの活動を通して、災害看護の構築だけではなく、看護の再構築も看護師へ投げかけているとも考えられた。今回の分析結果からは、この点を深く掘り下げることまではできなかったが、いち看護師の枠を超えた活動だけでなく、これからの看護を担う看護師たちへの看護の心髄を伝える教育者の側面も今回の分析を通して多く伺えた。

#### 参考文献

- 1) 黒田裕子:阪神大震災を通して自己の可能性を見つける一人と人とが向き合うなかでの 私,似田貝香門編:ボランティアが社会を変える一支え合いの実践知一,関西看護出版, 2006.
- 2) 黒田裕子:「ふれあいテント」ボランティア活動-西区を中心とした活動を通して一, 都市政策, Vol.86, 1997.
- 3) 室崎益輝:被災地の天使・黒田裕子さん:その思想と行動,震災学, Vol.6, 2015.
- 4) 黒田裕子: 災害時における社会資源の活用, 酒井明子, 菊池志津子編: 災害看護 看護 の専門知識を統合して実践につなげる, 南江堂, 2008.
- 5) 黒田裕子:地域と共に歩む災害復興と看護の経験値-「いのち」と「くらし」を育む 災害看護-、日本災害看護学会誌, Vol.11, No.3, 2010.
- 6) 黒田裕子:仮設住宅でのボランティア活動-「人間」と「生活」を視点に-,日本災害 看護学会誌, Vol.2, No.1, 2000.

## 第4章 触れる・わかる・支える 黒田裕子の看護哲学の再構成 高原耕平

#### 4.1 触れたらわかります

生前の黒田裕子さんに一度だけ会ったことがある。2014年7月7日、神戸市西区・伊川谷の「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」の事務所に伺った。わたしはそのころ大学院生で、地域のNPO等で半年間インターンシップをするという授業を取っていた。大学院の研究テーマとして阪神大震災を選んでいたため黒田さんが代表を務めていた同「ネットワーク」をインターンシップ先として薦められた。インターンシップは秋学期から始まる予定で、その事前の挨拶のために来たのだった。

授業の担当教員だった石塚裕子さんりと二人で「ネットワーク」の事務所にたどりつくと、 黒田さんはいなかった。外を回っている、もうすこししたら帰ってくるので待っていてとス タッフに言われた。そうして待っていたら、たしか 20 分ぐらいして彼女は現れた。小柄な おばあさんだな、というのが第一印象だった。小柄で、とても体重が軽そうに見えた。ただ、 おばあさんと言うには脚の運びが鼬のようで、一定のペースですたすたすたすたっと近づ いてきた。エネルギーや威厳や迫力や風格なんてものを纏っていたら仕事が遅くなってし ようがない、ただ近づいてゆきたいから近づくのだというかんじがあった。わたしはわたし で、この黒田さんというひとはずいぶんな偉人であるからと重々言い聞かされていたので、 直立不動の姿勢を取ってお辞儀した。すると黒田さんはすたすたの流れのまま、ハイハイお 聞きしておりましたよ、といったことを言いながら椅子をサッと引いてわたしに着座をう ながした。

その椅子の引き方に、いまだに強烈な印象をもっている。否応無くというのか、さぁお座りなさい、という意志がその所作の全てに満ちていて、それ以外の余分なものが無かった。もったいぶった余韻も、こちらの意志の斟酌も無くて、ただわたしはそのままそれに従って座るほかなかった。コミュニケーションのゆとりが無く、かといって強制されて押し付けられたのでもなく、ありがたいような困惑するような。しかし黒田さんはこの接遇を完遂させることに全身を集中させていて、本当にそれだけだった。

30 分ほど話していた。いまのわたしが同じ機会を得たなら、きっと事前に質問項目のメモを用意して IC レコーダーを回して、気合を入れすぎたやりとりに終始するだろうとおもう。そのころわたしは何も知らなくて、ただ知りたいことをすとんすとんと聞いた。それは案外に奏効したらしく(知らないということはおそろしいことだ)、黒田さんもすとんすとんと答えて話した。そのようなわけでなんの記録も取っておらず、内容をほとんど思い出せない。ただ、つぎのひとことだけはよく思い出す。

わかります。そのひとの肌に触ってごらんなさい。はだに触れたら、そのひとが何に苦 しんでるか、なにを言いたいか、ぜんぶわかります。 どうもこの黒田さんというひとは、ものをおおげさに言うひとではないよなとそのとき感じていた。だから「触れたらわかる」というのは本当にわかるのだろう、しかし何がどうわかるのか、自分にはさっぱりわからない。そうおもった。おそらく「触れる」「わかる」の意味合いが違う。ロボットのセンサーが対象を舐め取って情報を抽出するのではなく、黒田さんとだれかのあいだにあらかじめ漂っているもの、にじみ出し始めているものを、間髪置かず邪心無くゆびさきから手のひらから直観する。なにかそういった現象かもしれないと考えたが、ふだんひとの肌に触れないし、わかりたいともあまり願っていないので、よくわからなかった。じぶんも黒田さんのように「触れたらわかる」ようになりたいなとはまったく思わなかったが、職人技の語り口にすぎないと片付けることもできなかった。彼女の確信の、その構造を知りたいとおもった。「触れたらわかります」の「わかり」の余韻がこちらの肌にまで語りかけてきているような。そのときわたしが黒田さんの肌に触れればよかったかもしれないけれど、そうはしなかった。

こうして「面接」は無事終わって、よろしい、10月から面倒を見ましょう、というようなことを言ってもらった。あなたは背が高いからまずこの事務所の天井のエアコンを掃除しなさい、と付け加えた。わたしは仕事を与えられて単純にうれしかった。その年の10月を前に黒田さんは亡くなられて、いちどきりの出会いとなった。

#### 4.2 問題の所在および方法

それからわたしは阪神・淡路大震災の復興住宅に通って博士論文を書き、そのあと「人と 防災未来センター」研究部に勤めることになった。就職の前年、「阪神高齢者・障がい者支 援ネットワーク」から人と防災未来センターに黒田さんの関連資料が寄贈されていた。黒田 さんが遺した大量の論文や被災者支援の記録資料に触れることになった。

本稿はそうした資料群や既刊書を用いて、黒田裕子が考え続けていたこと・書こうとした ことを再構成するこころみである。

黒田裕子は膨大な論文やエッセイを遺した。新聞などのインタビュー記事も多い。それらを時代順に通して読んでゆくと、黒田が自身の根本的な思想をさまざまな角度から検討し、深めようとし続けていたことが伺える。それは「想い」や「ノウハウ」の集合体とは異なる、災害を生き延びたひとびとのいのちを支えることについての根本的な思考のつみかさねである。そこでは看護と福祉、またターミナルケアや在宅医療といった分野にまたがるような領域での思考が展開されており、その独自性は明らかである。

しかし、黒田が遺した既刊論文はそのときどきの個別のテーマや関心に注力しており、自身の根本的な思想の完成形を言語化・体系化するには至っていない。言い換えれば、黒田裕子は自身の看護哲学を掘り下げ続け、実践し続けていたが<sup>2)</sup>、一本の論文というかたちで明確に結晶化させることはなかった。以上が筆者の見立てであり、本稿の仮定である。この仮定に立って、本稿は、黒田が遺した既刊論文をもとに、文献研究によって彼女の看護哲学を

再構成することをこころみる。それによって、災害看護の本質や理念といったことについて の今後の議論に参照項のひとつを提供することができるのではないかと考える。

しかしこの目的をめざす前にいくつかの予備問題を検討しておく必要がある。第一に、過去の文献をまとめたからといって、それが黒田裕子の思想そのものと言えるのかという問題がある。これは黒田裕子が遺したものとは何か、という問いに近い。その表面上の形態を考えるだけでも、たとえば公刊された論文・書籍の他にも、災害看護分野における「弟子」たち、人的ネットワーク、学会、支援団体、制度、マニュアル、被災者支援の記録、講演や講義により直接間接に影響を受けたひとびとなどが「黒田裕子が遺したもの」には含まれるだろう。また、被災地で彼女とそのチームから支援を受けたひとびとの存在や、「災害看護」という理念・分野自体もその範囲に含むという考え方もできるかもしれない。

仮にこれらのもの全てを調査しつくしたとしても、あるひとつの像に収斂することはないだろう。そのようにしてひとつの像を作り上げたとしても、それが黒田裕子の思想そのものと全く等価であると言うことはできない。思想とは何より生きて動いているものであるから、遺されたものから再構成したものはそれ自体が独立したひとつの生命を持つものであって、生前の(あるいは「いま」の)黒田当人の思想の写像ではない。また、ある対象をある角度から調査分析した結果と、別の資料を別の角度から調査分析した結果のどちらが優れているか、どちらがより真実に「近い」かを裁定する基準は一般に存在しない。特定の資料や人物への聞き取りのみに依拠した調査結果が、できるだけ多くの資料・人物に依拠した調査結果より常に劣っているとは言えない。卓越した思想家や行動者の思想・人物像とはそもそもそうしたものである。実際、柳田・酒井編(2018)では12人の共著者がそれぞれの黒田裕子の記憶をもとに『災害看護の本質』を描き出しているが、「現場」「人間」といったキーワードで共通しつつも重点の置き方が著者ごとに異なっている。したがって、本稿が提出する文献研究の成果は、あくまで既刊論文・書籍のみから再構成した看護哲学であって、唯一の解ではありえない。別の資料や角度から得られた成果と調和することもありうるし、そうでないこともありうる。

第二に、本稿の筆者は看護師・医療関係者ではない。業務や研究の一環として災害現場に関わることがあり、また現役看護師と研究実践等で間接的に関わることがあるものの、(災害)看護の世界には全く属していない立場である。このことは黒田の看護哲学を研究するうえで不利である。患者・被災者の生命を守るという使命感や義務、専門的技能、知識、現場経験があるからこそ黒田が書いていることや事績の意味がありありと理解されてくるということがあるはずだ。この点については本職の看護師・医療関係者・被災者支援に献身される方々が本稿の内容をどう受け取られるか、ご批評をお待ちするしかない。ただ、黒田の思想は看護師としての姿勢をつねに原点としつつ、その射程は看護分野のみに制限されるものではないと考える。したがって門外漢が読み取れることもまたあるのではないかとも考えている。

研究方法は人文学の伝統的な文献研究の方法をそのまま援用する。すなわち、黒田が長年

の活動により自身の思想を徐々に深化させていったという前提に立ち、時系列で文献を整理・読解し、鍵となる概念や理念を抽出する。その表現や意味あいの変化を追いつつ、重要と考えられる概念を、誰が読んでもわかるように言語化しなおす。さらに、複数の概念や主張について、相互に矛盾が無いように整理・体系化する(あるいは相互矛盾と考えられるものがあればそれを明示する)。実際に黒田の論文を読んでゆくと、特定のフレーズ・用語を時期ごとにゆるやかに変えながら用いており、こうした方法を適用しやすい。調査対象として、文末に記した16件の論文・書籍を用いた。なお災害看護の具体的ノウハウを集約したものとしては黒田(2005)がもっともコンパクトにまとまっている。似田貝編(2006)所収の手記は、阪神・淡路大震災期からの活動における黒田自身の実感を含んだものとしてはもっとも充実している。

#### 4.3 先行研究

黒田の周囲にいた人物が彼女の思想に迫った文献として、まず柳田・酒井編『災害看護の本質 語り継ぐ黒田裕子の実践と思想』(2018)がある。前述のように、本書は災害看護・被災者支援に携わってきた12名の人物が黒田との関わりを描きつつ災害看護の本質を言語化したものである。本書は本稿にとってもっとも大切な先行研究であるが、その内容全体をここに要約することは難しいため、以下では同書所収の南裕子「黒田裕子さんとフローレンス・ナイチンゲール」を取り上げる。加えて、黒田の活動をバランス良く総括していると思われる室崎(2015)を参照する。

室崎(2015)は、被災者支援のボランティア活動に専念し始めてからの黒田の活動が大きく5つに分けられるとする。次節以降の議論の土台となるため要約して紹介する。

- (1) 西神第7仮設住宅での活動に代表される「被災者見守りの活動」。仮設住宅内に拠点を設けて泊まり込み、文字通り24時間の支援を続けた。ただし支援は一方的に与えるべきものではなく、つねに自立を「引き出す支援」が志向された。
- (2) 制度面を含めた「避難所等での生活環境の改善」。避難所・仮設住宅等の劣悪な環境が 改善されなければ自立・復興は無いとの観点から、生活環境の改善に努めた。著者は避難所 のトイレ問題を最も早く指摘したのは黒田ではないかと指摘する。また、能登半島沖地震 (2004 年) での支援活動は福祉避難所制度の嚆矢となった。
- (3)「災害看護という新領域の確立」。ライフラインや住居といったハード面だけでなく、医療・看護が携わる心身のソフト面の支援の必要性が明らかになった。そのための災害看護の体系を黒田は「時間のつながりで捉える、人間のつながりで捉える」と表現し、そのつながりを、急性期・亜急性期・慢性期・復興期までおよぶ「災害看護サイクル」、行政・地域・企業・病院・ボランティア、また多様な医療関係者が連携する「災害看護ネットワーク」という形で定式化した。また、「災害看護支援機構」の活動は災害看護の社会定着化の役割を担った。
  - (4)「看護やボランティアの後継者の育成」。被災者への関わり方の機微を現場での実践教

育によって伝えることに注力した。

(5)「ボランティア活動基盤の育成」。看護活動は市民活動の充実に基礎を持つとの考えから、市民団体に活動資金を助成する「しみん基金・KOBE」「あいウォーク」をいずれも 1999 年に立ち上げた。

以上のように概括したうえで、著者は黒田が「被災地のマザー・テレサ」と親しみを込めて呼ばれてきたが、むしろその実像はナイチンゲールの方が近いのではないかと言う。すなわち、被災者のためにただ献身的に活動するだけでなく、環境・制度の改良や災害看護分野の後継者育成までその思想と実践のなかに含まれており、これはナイチンゲールがクリミア戦争とその後に取り組んだことと近い。

南(2018)も同様に黒田とナイチンゲールの「二人の活動の根底がとても似ている」として、その要素を以下の3点にまとめている。(1)現場重視の姿勢。率先して現場(被災地、戦場)に赴き、後方との連携をシステマチックに行う。看護の域を超えて、現場で気づいた生活や衛生上の課題を解決し、立て直してゆく。被災者・傷病兵個々人に対するケアを重視する。(2)看護教育の重視。黒田は現地での実践を通じた教育は元より、テキスト執筆や大学での教育、研修会の企画・実施までをこなしたが、これは看護教育の祖として知られ、軍に医学校設立を促したナイチンゲールと相似する。(3)学術的活動の重視。黒田は看護学の領域を越えた視野に立って災害看護学会大会を主催し、博士論文(2012)をはじめとして多くの論文を遺した。ナイチンゲールもまた、クリミア戦争後に膨大な資料を整理し、説得力の高い調査結果を遺した。また軍に統計局に設置を働きかけたのも彼女である。

室崎・南ともに共通している見立ては、また柳田・酒井(2018)の共著者の大半が指摘していることでもあるが、黒田の思想と実践が徹底的な〈現場主義〉に立脚していることだ。ただし、その現場主義は被災地で人々と接する場面、つまり被災者と一対一で「肌に触れる」場面に限定されるのではなく、避難所や仮設住宅の環境改善、制度やマニュアルの確立、後継者の育成など、「触れる」場面から空間・時間ともに超えてゆく。そうして超えた活動の結果が、地域生活における被災者の自立・復興へと再び集約されてゆく。このような構造があり、なおかつその触れる一超えてゆく一被災者の自立という循環を彼女自身が徹底的に実践しようとしている。

黒田の現場主義を再度要約すれば以上のようになるが、では現場に有りながら現場を超えてゆく、この構造の内部のはたらきを黒田自身はどのように考え、言語化していったのか。いいかえれば「触れれば、わかる」ということの「わかる」というはたらきが意味するものはなにか。このことを次節の文献研究によってさぐってみたい。

#### 4.4 分析

黒田の看護哲学における〈現場主義〉は、「人間と生活」「地域とコミュニティへの視点」「今をここでとらえる」という3つの要素から解釈が可能である。ここから、黒田が遺した文章を引きつつ整理してゆく。

#### (1) 人間と生活

私たちは、対象と向き合う時の原点として、「人間」と「生活」を忘れないようにして活動を開始した。/震災によって種々な苦痛を抱き、その苦痛と向き合っている人間が、今ここにいる。そして、生活をしている。このことがよりよいケアの第一歩であったからである。それによって、一人の人としてのいのちを重んじることができるからであった。(似田貝編 2006, pp.39-40)

黒田が西神第 7 仮設住宅での支援活動を回顧するとき、またその後の災害看護について 論じるとき、一貫して強調しているのがこの「人間と生活」という視点である。黒田の看護 哲学において、人間と生活は別々のものではない。だが敢えてまず 2 つを分けて、それぞれ が含意することを解釈する。

黒田が「人間」と述べるとき、そこには大別して2つのことが含意されている。第一に、 人間とは常に個別具体的なひとりの人間であるということである。個別的であるから、避難 所や仮設住宅にいるそのひとのニーズもまた個別的である。

避難所での集団生活は、コミュニティに配慮するとともに、個人の特性にも配慮した身体的、精神的、社会的側面からの環境づくりも大切である。[…] 麻痺のある人は、どちら側に麻痺があるか、機能する手はどちら側と考えて [避難所での] 位置を決定する。 […] 受験時期で、受験生がいればその人たちの環境にも配慮する (阪神・淡路大震災の1月17日はセンター試験の時期だった)。(黒田 2005a, p.53)

平常時の病院看護であれば身体麻痺者と受験生への配慮は同時には現れない。しかし避難所ではそれが生じうる。平常時の看護の枠が消失した現場で活動の起点となるのが、対象 (被災者) の個別的存在である。

第二に、その個別具体的なひとりの人間は、つねに尊厳を持った存在だということである。

〔仮設〕住宅内にも問題があった。〔…〕天井の隙間から、光や雨が入り、畳の隙間からは草が加温をのぞかせる、虫が入る等……。〔…〕人間として住むことの出来る環境こそ安らぎがあり、QOL を高めることができるのである。(黒田 2000, p.4)

尊厳を保つとは人間らしい生活環境を保つことである。このことを黒田が強調するのは、 避難所や仮設住宅でそれが保障されない状況があまりに多く、また非常時だからとその状 況が受忍さるべきものとして扱われがちだからであろう。しかし尊厳が失われた状態とは 結局のところ生命を危うくする状態である。

そうした個別具体的で尊厳を持った人間は、つねに生活を営んでいる存在である。避難所 や仮設住宅や復興住宅のような、日常生活が損なわれた状況であるからこそ、生活上の困難 が発生し、それが QOL 低下に直結する。したがって、個別具体的なニーズはしばしば生活 状況の観察によって発見される。

バリアフリーを考慮した最新住宅は、昔の人にとっては意外に扱いにくい。ワンタッチボタン等使ったことがないので、あっちこっちとさわっている間によりわからなくなり、「お水が出ない」「お湯が出ない」とお風呂も入れなかったり、食事も作ることなく、出来上がりを買って来たりしていた例もあった。(ibid.)

仮設の中には木1本もない。棟番号が記されていても、高い位置にあり、老人にとってはとても小さい字で記されているため、目にとめることができなかった。[…] そこでボランティアは、棟番号の張替えを行った。[…] 雨に強い塗料を使用して、目の高さの位置に大きい字で棟番号を書いてまわった。(ibid.)

黒田にとって「生活」とは抽象的な概念ではなく、給湯器のボタン、仮設住宅の棟番号、 その玄関や風呂の段差のように、そこに住むひとびとがじかに触り、つかみ、目で捉える具 体的なモノであり、それらを支えとして営まれているコトである。

#### (2) 地域とコミュニティへの視点

この「人間と生活」の基盤が地域とコミュニティであると黒田は言う。避難所期や西神第7仮設住宅期でも人間関係としての「コミュニティ」の重要性が述べられていた。仮設住宅から復興住宅などへ住民が移るフェーズに入ったことで「地域」が大きな課題として意識されたと思われる。

コミュニティとは、単に「地域社会」を意味するのではなく、共通の背景や興味を有する人々の自由な意志による集団を意味し、人々の結びつきを表す。つまり「くらし」「生活」における大切な基盤である。(黒田 2003, p.57)

阪神・淡路大震災では復興住宅への入居は抽選で決められたため「それまでのコミュニティから切り離され、知り合いの全くいない土地での孤独な生活からスタートしなければならなかった」(黒田 2003, p.58)。高齢者にはこの影響は大きく、ときに地域との関わりを断ってうつ病やアルコール依存症に陥ったり、孤独死という結果を招くことになった。黒田が参照するコミュニティケアの源流はイギリスにおける精神障碍者に対する地域援助が目的であったが、「我々は被災者全体をコミュニティケアの対象として、その人がその人らしく

生活できる、「人間」として尊厳をもった生き方ができるように支援する必要がある」(ibid)とする。言い換えれば、復興期にあっては地域が主体となって被災者を受け入れ、関係をつくり、それによってかつての被災者もまた地域の主体となる。現実にそれがどれくらい達成されたか/達成されうるのかは別として、この理念にしたがって黒田は支援活動を続けた。その要点は、地域住民同士が共通の体験を持つ「場づくり」、住民がそれぞれの役割を分担する「人づくり」であり、それを通じて「「地域」と「暮らし」の一体化」(ibid)を目指す。それによって被災者の本当の「自立と復興」が達成される。看護はこの一体化の醸成を支援する。「看護はコミュニティのなかにあり、コミュニティのなかより浮上する」(黒田 2006a, p.9)。

#### (3) 「今をここでとらえる」

大切なのは、年齢とか資格のあるなしではなく、「今をここでとらえる」ということです。(黒田 2005b, p.23)

ここまで見たように、黒田の災害看護の思想と実践は、人間が一定の時間をかけて災害から立ち直り自立してゆくことを前提としており、その全期間(避難所から、復興した地域での暮らしまで)を支えることが「災害看護」に含まれる。言い換えれば、災害を生き延びたひとが、心身の健康、「人間と生活」、「地域と暮らし」を取り戻してゆく過程全体を支援することである。

その支援を実際に行うために黒田が強調することの第一が、被災者と一対一で対面する、 あるいはその生活を間近に見るという場面での全身的な把握である。この把握には、「五感 の重視」「想像・共感」「実践の意味づけ」という3つの要素が含意されている。

被災地にお入りになったら、その被災地の全体の空気にふれてみて下さい。そして、においを嗅いでみてください。その中で対象と向き合って下さい。避難所に行かれたら、傍で座って、お話をするだけでも、心が和むっていうことが、ございます。(黒田 2006b, p.61)

人の言うことには一つ一つに意味があります。それを受け止め、それによって行動しなければなりません。そのために必要なのは五感をしっかりはたらかせることです。それこそ指がひとつ動くだけで、その指の動きが何を物語っているのかがみえるように。それは看護師としてふだんから必要なものですよね。(黒田 2005b, p.25)

被災地の「全体の空気」「におい」を感じ取ったうえで、そこにいるひとびとの生身の状況を五感で感じ取ることを黒田は勧める。「傍で座って、お話をする」ことも、被災者が置

かれたその場の雰囲気や、被災者自身が醸し出している雰囲気を捉えるとか、そこに"合わせて"ゆくといった意味があるだろう。そこから「指の動きが何を物語っているのか」がみえるようになってくる。

こうした鋭敏さを強調するのは、ひとりひとりの個別具体的で生活文脈に即したニーズ が被災地では容易に捉えがたいからである。

でも言わない人もいます。もう、下を向かれます。上を向いていらしたのにも関わらず、このことを言ったことによって、下を向かれた時には、ここに言葉があるのですね。言葉があるから、その時には、言いたくないのだけれど、「我々のことをそれだけ気遣ってここに来てくださっているのだな」っていうのをわかるわけですから、肩に手をあててさし上げて下さい。みんながみんなそうではないかもわかりませんが、涙を流されます。そして、そのぬくもりを感じ取ってくださるっていうことですね。これは言葉なんですね。(黒田 2006b, p.62)

黒田にとって、沈黙は沈黙ではない。下を向く、目をそらす、手を当てた肩の体温、表情のこわばり、それら全てが「言葉」である。自身が手を当てていること、相手の肩がそこにあること、両者の体温が互いに同時に感じ取られていること自体が一つの意味を持つ。

こうした共感や微細な把握は、それに対応したその場その場での行動につながっている。 黒田はこれを行動の「意味づけ」と表現する。

看護師さん達っていうのは、特に行動の 1 つ 1 つに意味づけをしてやるっていうことと、物資 1 つ 1 つに、意味付けをしながら、行動をすることが、とても大切なんです。 (黒田 2006b, p.61)

担い手に必要なことは、相手と向き合うときにみえないものをみる力を成熟させることである。また、聴く力である。言葉だけを聞くのではなく、1 つひとつのしぐさ、表情、音などからその人のいまをとらえることで、命を救うことができる。(黒田 2012, p.12)

ここでの黒田の「みえないものをみる力」「聴く力」「とらえる」「意味付けをしながら、行動をする」という表現は重層的である。一般的には、アセスメントと支援行動、診断と治療はおおまかに分離している。まず対象のニーズや病状を精査してから、必要・可能なケアの方法を組み立て、その実行に移るという段階が踏まれる。これに対して黒田の思想と実践では「傍に座る」「肩に手を置く」「その人のいまをとらえる」こと自体が、把握であると同時に相手に対するケアでもある。そこでひとつのケアが成立しつつ、その次の行動(たとえば薬の箱を作る(黒田 2006c, p.135)、避難所でお経を上げる(似田貝編 2006, p.26)、棟番号を

書く)が読み込まれてゆく。この行動は前節の「地域」や、さらには政策提言まで含まれる。

みて感じたことなど、法整備されていないものなどは言語化し、政策提案も心しておく ことが重要である。(黒田 2012, p.12)

ここまでの整理を集約すれば、「今をここでとらえる」とは、そのひとの個別具体的な、 生活文脈に根ざしたニーズを共感的に直観し、その場面内での対応だけでなく、地域コミュニティの醸成や法整備(そしておそらくは後継者育成も)に至る、深い射程を持った支援行動をその直観のなかで読み取るということであろう。東日本大震災の直後、黒田はこのことを「トータルでとらえられるような能力」(黒田 2011, p.25)と表現している。触ったとき、すでにそのひとの個別の苦しみやニーズと、その背後にある地域課題や法整備の必要性といったことまで「わかる」ことを理想とする。触れようとした瞬間から、それらを捉え、解決策を実行することまでがすでに始まっている。

#### 4.5 考察:黒田の看護哲学は「看護」なのか?

以上、黒田の思想と実践における〈現場主義〉を、「人間と生活」「地域とコミュニティ」「今をここでとらえる」という3つの視点から解釈した。それにより、黒田の看護哲学が、単に現場に赴く・被災者と接するという意味の現場主義ではなく、被災者の自立と復興を「トータルで」とらえ支える、つまりミクロな生活場面から地域コミュニティやマクロレベルの政策提言まで収める射程をもって、発災直後の避難所から仮設住宅退去後の地域生活までの期間で、こまやかな共感と把握によってひとりひとりを支えようとするものであることを明らかにした。

ここで問わざるをえないのは、黒田の思想と実践は果たして「看護」の枠内に収まるものなのかということである。黒田自身、その全てが狭義の看護に含まれるということは一度も述べていない。地域コミュニティにおける支援ではボランティアを含めた多様なアクター・専門職のチームワークが重要であると黒田は強調している。他方で、黒田が「トータルで」と言うとき、個別の解決に際しては他の専門職につなげるとしても、課題の全体像の把握と解決への献身においては被災者に向き合った看護師が第一に引き受けるべきものという理想があったように思われる。実際、彼女の実践や教育、また被災者に接する態度はつねに看護師としての姿勢を基本としていた。

ここでは看護という営みの境界設定に関する原理的な困難が現れているように思われる。 黒田が成し遂げたさまざまな支援活動を個別に取り上げれば、狭い意味での、一般に期待される看護や医療活動からは外れるものが現れる。たとえば家族を喪った避難者と避難所で共に祈るとか、仮設住宅の棟番号を書き直すといった実践である。この点で黒田の思想と実践は、あくまで被災者支援の思想と実践であって、「災害看護」ではないのかもしれない。 他方で本章の分析から見えてくることは、被災者が投げ込まれた状況に共に身を置き、身 体に触れ、語られぬ苦痛を聴き取り、個別の課題を解決しながら、回復プロセス全体あるいは生命の終焉まで全人的に支えるという営みはたしかに看護の本質と軌を一にしているということである。看護師として始めた以上は「ここからは看護ではない」と限界を設けて離脱することができないという性質がある。触れる、わかる、支えるという原則を被災地で用いることが「災害看護」であるならば、黒田がめざしたトータルな被災者支援の実践こそが災害看護の本質であり、むしろ看護そのものの本質がそこに現れているということになる。

#### 注

- 1) 当時、大阪大学未来戦略機構・特任助教。現、大阪大学大学院人間科学研究科・特任講師、公益財団法人ひょうご 21 世紀研究機構研究戦略センター研究調査部・主任研究員。
- 2) 黒田の活動を西神第7仮設住宅から追い続けていた山崎登(当時、NHK記者。現、国士舘大学教授)は、黒田の探求の深化について次のように指摘する。「「被災者に寄り添う」というフレーズが1995年以降しばしば聞かれるようになったものの、実際にそれを行えたひとはほとんどおらず、黒田はその数少ない例だった。黒田自身もその思想と実践の具体的方法については手探りであり、被災者支援の具体化を期待する世相が黒田をいわば象徴化し、それに後押しされた黒田が被災者支援の思想と実践を深化させ、さらに象徴化が続くという循環構造があったのではないか」(2020年12月、人と防災未来センター部内研究会でのコメント)。本稿では黒田の探求を彼女個人の活動と仮定して論じているため、社会との相関性という山崎の視点は充分には取り入れられていない。

#### 汝献

黒田裕子: 災害と介護、日本在宅ケア学会誌, Vol.15, No,2, 2012.

黒田裕子: 災害時には互いに支え合い利用者に寄り添うことが大切,介護保険,Vol.185, 2011.

黒田裕子: 災害とボランティア —避難所・仮設住宅・復興住宅の体験を通じて,福祉労働, Vol.115, 2007.

黒田裕子:「人間」と「地域」と「くらし」を支えるということ 被災者と共に歩んできた 経験を通して、日本在宅ケア学会誌、Vol.10、No.1、2006a.

黒田裕子: 災害時における看護師の役割 災害時の体験から学ぶ,日本赤十字広島看護大学 紀要, Vol.6, 2006b.

黒田裕子:阪神・淡路大震災時の体験を通じて,看護,11月臨時増刊号,2006c.

黒田裕子: 避難所における看護ケア 救護センター併設の必要性, インターナショナルナーシングレビュー, 2005 年臨時増刊号, 2005a.

黒田裕子: インタビュー 黒田裕子さん 災害ケアから看護の原点がみえてくる, クリニカルスタディ, Vol.26, No.8, 2005b.

黒田裕子: 震災が生んだ新たなコミュニティケアづくり, コミュニティケア, Vol.5, No.1, 2003.

黒田裕子: 仮設住宅でのボランティア活動 - 「人間」と「生活」を視点に一,日本災害看護学会誌, Vol.2, No.1, 2000.

柳田邦男, 酒井明子編: 災害看護の本質 語り継ぐ黒田裕子の実践と思想, 日本看護協会出版会, 2018.

室崎益輝:被災地の天使・黒田裕子さん その思想と行動, 震災学, Vol.6, 2015.

似田貝香門編:ボランティアが社会を変える, 関西看護出版, 2006.

#### 第5章 黒田氏との思い出

#### 5.1 黒田裕子の後ろ姿を追って

#### 阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク 宇都幸子

黒田裕子が旅立って6年2ヶ月が経った。1995年1月17日の阪神・淡路大震災を契機に 市立病院の副総看護婦長という職を離れてボランティア看護師に生活のすべてをささげた ことはすでに多くの人の知るところである。この稿では「黒田」と呼び捨てにすることをお 許し願いたい。筆者にとってはあまりにも身近で「・・さん」「・・先生」は馴染まないの で・・。

筆者が黒田と初めて会ったのは1996年7月、阪神・淡路大震災から1年6ヶ月後、西神第7仮設住宅でのことだった。それからの18年余り、黒田とともに活動し、忙しすぎる黒田をサポートし(してきたつもり・・)、黒田から多くのことを学んだ。

看護職でもなく、仮設住宅支援に何か役に立つことができればと飛び込んだ筆者ができることは当然のことながら黒田が発想し展開する「被災者支援」の末端の作業にすぎなかった。与えられた仕事は黒田が現場責任者として統括していた阪神高齢者・障害者支援ネットワークの事務と会計であった。事務を執りながら黒田の後姿を見続け、黒田が何をしようとしているのかを必死で探し、筆者の夢がある部分重ねられた時間だった。

病院看護師として患者様中心の看護の在り方をフローレンス・ナイチンゲールの思想を研究し深め現場を構築してきた黒田にとって、仮設住宅支援における看護(のちに言う<災害看護>)はナイチンゲールの思想を確認する機会であったのではないかと思える。

筆者には「病院にいたときとは全く異なる看護があった」という表現で語ったことがある。前者における<看護>は入院しておられる患者様と通院中の患者様の「病」を治し、元のお元気な体に戻す事だった。そうした中で入院中の患者様にとって病室がどれだけ過ごしやすく、苦痛をどのように軽減できるかを模索し工夫していた(著書『ナースコールの向こう側』サンルート・看護研修センター に詳しい)。また、退院後の患者様の自宅住まいにおける地域医療にまで思いを馳せていた。

一方、「異なる看護」の被災者支援での看護は黒田を大きく飛躍させる世界であったと本人も語っていた。広大な西神第7仮設住宅に拠点を置き西区内の約3,000世帯をカバーする活動のなかで、黒田にとって被災者=患者様であった前提は全く覆ったようだ。「被災者である前に一人の人間」である、被災した人々を一日も早く元の<くらし>に戻したい、と願う活動があった。

「元のくらしに戻す」。くらしとは健康面だけではない。地域・人と人の関係・経済 etc,etc.。 黒田の活動は必然的に多方面に及び、その忙しさは日を追うごとに高まっていた。

その後の黒田の広範な活動や成果については、各分野の方々からの稿に譲り、筆者の稿では黒田の何がここまで筆者を含めた多くの人々を引き付け、愛され、語り継がれるのかを黒

田の日常から探ってみたい。

日本災害看護学会創設者である南裕子氏(現 神戸市看護大学学長)は「黒田さんは、日本のフローレンス・ナイチンゲールだ、いやそれを超える人である」と評して下さっている(柳田邦男・酒井明子編著『災害看護の本質』日本看護協会出版会)。

ふっくらした類、聖子ちゃんカットに髪を整えたおしゃれな姿。当時の同僚看護師たちの話題をさらった赤い聴診器。看護師初期のころから研究熱心であると共に黒田流おしゃれにも拘りを持っていたことがうかがわれる。

前述の『ナースコールの向こう側』には黒田の看護 の原点となる具体的な記述がいくつもある。患者様が



兵庫医科大学附属病院勤務時代 当時の上司 山田繁代氏提供

看護師・黒田を育てた記録でもある。患者様の言葉や体での表現をしっかり受けとめ看護師 の自分に何ができるかを深く考え工夫をしている姿が見える。

筆者はそれまで「看護師さん」について「病院でドクターの補助をする人」くらいにしか理解出来ていなかった。黒田に出会い、その年の暮れ(1996年12月)に同書を「ハイ!どうぞ」と手渡された。この本を読み、筆者の「看護師さん」観は"目から鱗"となった。看護の世界の奥深さを学ばせもらい、黒田の「生と死」「看護」に真正面から向かう真摯な姿勢に深い感動を覚え、更に黒田の姿勢を知りたいと思った。看護を通して黒田の目はその先を見ている、ひとりの人間人としてのくらし・地域を創ることを目標に掲げていることを。

くらしへの工夫は震災直後の避難所でも発揮され混乱する避難所の衛生環境を整えるため、トイレ・洗面所の清潔を保ち、受験を控えた学生たちの学習スペースを確保し、肉親を亡くされた方々のためにダンボールで簡易お仏壇を作成して悲しみを共有した。震災遺児となった C 少年にとっても避難所の黒田は心に残る存在となり、成人し看護師となった。



16年ぶりの再会 2010.12: 宝塚市立体育館にて C 君と

マスコミを通じて黒田を探していた。 あの日から 16 年、感動的な再開をは たした(左の写真)。具体的な事例は 枚挙にいとまがない。

避難所から仮設住宅、更に復興住宅での献身的な活動は、それに触れた人々の心を動かすものである。片や自分にないものを他者に甘える、甘え上手でもあった。筆者たちのスタッフメンバーにも厳しい要求をするが、自身の「くらし」には時間の

余裕もなく、食事をはじめとしてあれこれ注文を出して甘えていた。看護職の世界では「黒田さんは雲の上の人」と聞かされていたがスタッフ仲間では親しみを込めた「裕子ちゃん!」でもあった。

今回、原稿依頼を受けて改めて18年数ヶ月を思い返す機会を頂いたが、改めて黒田の生き生きした姿や声、活動の様々な場



島根医大付属病院にて柳田邦男氏より「死後生」を贈られた

面が心に浮かぶ。神戸で引き継いでいる市営住宅の見守り活動や災害看護師の育成、被災地 支援、それぞれに黒田がしたかったことが何であったかを振り返り、方向が間違っていない かを確かめている自分がいる。多くの人たちが同じ思いでいる事と思う。

柳田邦男氏から黒田に送られた「死後生」という言葉は、今更ながら筆者の心に響いている。 色紙に認めて下さった言葉は

「死後生」・・いのちの精神性は永遠です。後ろを生きる人たちの心の中で生き続け、 新しい人生を膨ませるのです。柳田邦男 黒田裕子さんへ

コロナ旋風がやまない 2020 年が終わろうとしている。災害看護の世界も神戸の市営住宅支援も通常の活動が継続できない日々だった。それでも黒田が遺した「人間のいのちとくらしを守る」という確固とした理念は黒田の後ろに続く人々には、コロナ以前と変わることなく活動の芯に生きていることを記しておきたい。また、人と防災未来センターには、黒田裕子と支援ネットの活動記録を収蔵して頂き、今後の被災者(地)支援に役立てるべく研究対象として頂けることを衷心からの感謝して終りと致します。(2020.12.9 記)

#### 5.2 黒田さんとのいくつかの機会

#### 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター 上級研究員 小林郁雄

黒田裕子さんに、ゆうこさんというのか、ひろこさんというのか、どっちが正しいんですか?とお聞きしたことがありました。どっちでもいいのよと、全くこだわりはありませんでした。たぶん「ゆうこ」さんが正確ではないかと思いますが。その黒田裕子さんに初めてお会いしたのは、神戸市の仮設西神第7住宅のふれあいセンターで、1996年の春のことでした。

西神第7仮設は1060戸あり、神戸市でも最大級の仮設住宅団地(隣接する西神第1の660戸と合わせると1660戸)でした。私は、被災者復興支援会議のメンバーとして、数人であちこちの仮設住宅を訪問して被災者の要望などを聞き取る移動いどばた会議だったか、その関連かで訪れた時に、ふれあいセンターでお手伝いしていた方の後ろ姿の写真を撮らせていただいたのだが、勝手に写真撮っちゃダメよと睨まれました。それが黒田さんとの初めての機会だったと思う。もちろん震災直後から避難所や仮設住宅での支援ボランテイアとして仮設のナイチンゲールと呼ばれていた黒田さんの噂はお聞きしてましたが、その時は知りませんでした。のちに兵庫県・神戸市などのいくつかの震災関連の委員会でお会いする機会が増え親しくなったときに、この写真をお見せして、睨まれましたと白状したけど、あらそう?と覚えておられませんでした。

#### ●960527 西神第7仮設



神戸市仮設西神第7住宅全景



ふれあいセンター(後ろ姿が黒田さん)



配置図(左端の赤い点がふれあいセンター)



仮設住民へのふれあい喫茶やカラオケ

その後、神戸復興塾や生活復興県民ネット、市民とNGOの「防災」国際フォーラムなどの会議でよく顔をあわせる機会が増えましたが、定期的に毎年お会いすることになったのは、中越での復興評価・支援アドバイザリー会議と、復活したこうべあいウォークでした。

「復興評価・支援アドバイザリー会議」は、中越大震災 6 周年復興祈念事業として 2010 年からはじまり、2014 年までの 5 年間新潟県長岡市で社団法人中越防災安全推進機構が中越復興基金支援事業で行われました。座長は中林一樹さん (明治大学危機管理研究センター特任教授)、委員は木村拓郎さん (日本災害復興学会 理事)、室崎益輝さん (ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 副理事長)、渡辺隆さん (新潟日報社 常務)と黒田さんと私の 5 人でした。黒田さんは NPO 阪神高齢者・障害者支援ネットワーク 理事長として、私は阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク 世話人の資格での参加でした。

阪神大震災の被災地で多くの支援組織が立ち上がっていた中で「センター」と名付けられたものが多い中、数少ない「支援ネットワーク」をお互いに名乗っていたことが思い出されます。いろいろな立場をまとめるセンターではなく、緩やかにつなぐネットワークが目的であり、被災地ではそれが重要であるという認識が黒田さんとは共有していたと、今になって思い返しています。

しかし、2014年の9月に黒田さんは亡くなられているので、3か月前の6月に中越でお会いした時まだまだお元気だったなあ。

#### ●中越復興評価・支援アドバイザリー会議(2010~2014年)





復興評価・支援助アドバイザリー会議 左 101022 第1回 右 140602 第5回 (最終回)



131023 中越復興9周年やまこし復興交流館「おらたる」開館記念式(左端が黒田さんと平井さん、右端が室崎さんと中林さん、挨拶しているのは泉田知事)

神戸復興塾が主催して、NPO調査で行ったサンフランシスコのエイズウォークを参考に、1999年の1月17日に「こうべあいウォーク(KOBE i-walk)」を始めた。第3回(010114)まで2~3000人ほどが参加する大きなイベントであったが、兵庫県の主催する「1.17ひょうごメモリアルウォーク」(2001年から)に席を譲り、以後は神戸復興塾有志などだけで継続して来ました。そして10年目の2009年から少し広く呼びかけて、こうべあいアイウォークを復活させ、NPOのしみん基金・KOBE(理事長・黒田裕子)と神戸まちづくり研究所(理事長・小林郁雄)が主催団体となって再開しました。

ということで、毎年1.17直前の日曜朝(2021年は月曜祝日の1月11日です)に、スタート地点の大国公園で受付・挨拶する黒田さんとお会いすることになりました。

しかし、この機会も2014年の1月を最後に無くなってしまいました。

●復活こうべあいアイウォーク(出発式/神戸市長田区鷹取・大国公園)





090111 こうべあいアイウォーク復活第1回 120115 こうべあいアイウォーク挨拶



130113 こうべあいアイウォーク挨拶



140112 こうべあいアイウォーク受付

#### 5.3 黒田裕子さんが言い残したこと

#### 国士舘大学防災・救急救助総合研究所 教授 山﨑 登

黒田さんと最初に会ったのは、阪神・淡路大震災が発生した翌年のことだった。当時、私は NHK で自然災害や防災を中心に取材する記者をしていて、地震発生直後から神戸市などを訪れ、被害の詳細や被災者の現状や支援のあり方、それに復旧や復興の課題などを考えるために、被災者はむろんのこと行政関係者や防災研究者、それにボランティアの人たちなどを取材していた。

神戸市西区に建設された「西神第7仮設住宅」に黒田さんはいた。勤めていた宝塚市立病院の副総婦長を辞め、被災者支援のボランティア活動に身を投じてから間もない頃だった。西神第7仮設は甲子園球場の2倍もの広さの敷地に120棟が並ぶ被災地で最も大きな仮設住宅で、ピーク時には1,060世帯1,800人が暮らしていた。当時行政は仮設住宅が完成すると、各地の避難所にいる高齢者や障害者から優先的に入所させた。このため最初にできた仮設住宅の高齢化率はのきなみ高くなり、西神第7仮設の高齢化率は47.4%、一人暮らしの高齢者は450人もいた。

黒田さんは仮設住宅の一角に仲間とともに青色のテントを張って住み込み、一軒一軒を訪ね歩いて声をかけ、応答がないときには電気メータを確認し、健康相談や生活の介助にあたっていた。黒田さんのテントはいつでも被災者が訪ねてこられるように 24 時間体制で開かれていた。理由を聞くと『被災者は昼間は元気にしていても、日が暮れて暗くなってくると寂しくなる。その寂しさに寄り添うためには 24 時間体制が必要だ』と話していた。

今のようにボランティアが社会的に認められている時代ではなかったから、被災者から「なぜ見ず知らずの人に、自分の病気や家のこと、困りごとを話さなければいけないのか」と言われている姿を見たこともあった。黒田さんはそうした被災者を何回も訪ねて信頼関係を築き、一人一人のカルテのようなものを作った。カルテが厚くなっていくにしたがって、黒田さんたちが持っている情報のほうが行政が把握している情報よりも詳しく、きめ細かくなっていき、黒田さんたちの活動に距離を置いていた行政も黒田さんたちを無視できなくなっていった。

仮設住宅での「グループハウス」は、そうした行政との協力関係の中から生まれた。高齢者が多い仮設住宅には様々な人がいた。家族や職を失い、アルコールに依存してしまう人や朝はご飯に塩をかけ、昼は醤油、夜はお味噌をつけて食べていて顔や足がむくんでしまった人もいた。また認知症の母親が息子から乱暴を受けていたケースもあった。黒田さんはそうした人たちを支援するために、まとまって暮らしながら生活を立て直す施設が必要だと考えた。そこで8世帯用の仮設住宅1棟を改築し、日本で最初の仮設住宅の中の「グループホーム」が作られた。

認知症の母親は息子と離れていろんな人と話すようになって、紙おむつを外せるようになったし、息子も母親と離れて暮らすようになって気持ちに余裕が生まれた。また職を失っ

た人のために内職のような仕事を捜してきて共同作業をした。こうした「デイサービス」と「集いの場」を兼ねた「グループハウス」は少しずつ成果を上げ行政にも評価されるようになり、その後の新潟県中越地震や東日本大震災などでは仮設住宅の中に併設されるようになっていった。

その頃黒田さんが繰り返し発言していたのは『被災者を患者として扱って病気を見るのではなく、一人の人間として、その人のそれまでの人生や文化、暮らしを見ることが大切だ』ということだった。被災者を支援するといっても具体的に何をどうしたらいいのかがわかっていなかった中で、黒田さんは『現場で考える』を口癖に、被災者と向き合う中でやるべきことを探り、被災者に寄り添った支援のあり方を作り、全国の被災地に広げていった。

災害や防災を専門に取材するようになり、黒田さんとは各地の被災地や防災の集まりなどでよく顔を合わせ、情報交換をしたり話しをしたりした。

黒田さんは東日本大震災の被災地にも駆けつけ、宮城県気仙沼市を中心に亡くなる1ヶ月前まで活動し、それまでの経験やノウハウを若い看護師などに伝えていた。最後まで細い体でエネルギッシュに活動し、被災者支援にかけた思いを伝えてもらおうと、NHKの総合テレビの「視点・論点」(2011年5月12日放送)に出演してもらった。番組の中で黒田さんは被災者を訪ねる際の注意点や心がけるべき点について、『安否確認は訪問の仕方によって異常の早期発見に努めることです。玄関の入り口からニーズがあります。(中略)たとえば履き物の脱ぎ方によって、台所の汚れ具合のなかから、換気扇の汚れ具合から、ゴミ箱の中にあるものの中から、室内の荷物の乱れから、会話の中からアセスメント、被災者の状況が把握できます』と話した。現場を見続けた人の細かい目配りと気づきがよくわかる内容だった。

黒田さんが亡くなった 2014 年の暮れ、神戸市で「黒田裕子さんを偲ぶ会」が行われた。 600 人ほどの人が集まった会場で、取材を通じて親交があった作家の柳田邦男さんが「黒田 さんが築いた被災者支援のスタイルは、現在の被災者支援の原型として実践されている」と 弔辞を述べた。

災害は常に弱い立場の人に大きな被害と多くの負担をもたらす。急速な高齢化が進む中、 日本の災害対策にとって、黒田さんが目指した防災と福祉や医療との連携は増々大きな課題となっていると思う。

#### 5.4 黒田裕子さんの思いで

#### 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授 室崎益輝

#### 黒田さんとのつながり

私が、最初に黒田さんにお会いしたのは、西神ニュータウンに建設された仮設住宅の調査に出向いた時だった。その仮設住宅で、被災者の支援活動をされていた黒田さんに、そこで暮らす人々の実態を細やかにお伝えいただいた。その時の熱い語り口は、今でも耳に残っている。

それ以降、様々な場面や場所で黒田さんとご一緒させていただき、大きな刺激を受けることになる。被災者支援のあり方を検討するグループワークの場で、真摯な議論を展開するときには、いつも傍に黒田さんがいた。そこでの議論で、「住宅を見るのではなく、そこでの被災者の生活を見ろ」、「被災者に心を通わせ、寄り添う姿勢を持て」と、叱咤激励されたことが忘れられない。

さらに、阪神・淡路以降の災害の被災現場を訪ねた時には、そこには必ず黒田さんがいて、多くのことを教えていただいた。黒田さんは、「ひとり一人の命と生活を大切に」という信念に基づいて、いつも災害の現場に真っ先に駆けつけて支援活動を展開されていた。2004年の中越地震、2007年の能登半島沖地震と中越沖地震、さらには2011年の東日本大震災などの被災地には、いつも身を粉にして奮闘する黒田さんの姿があった。

そうした被災地で黒田さんは、「避難所のトイレ」や「仮設住宅のゴミ箱」を私に見せ、被災者の暮らしに寄り添うことの意義を伝えようとされた。被災者との会話の場にも私を連れ出して、被災者と心を通わす大切さを教えようとされた。「立ったまま上から話をしては駄目。腰を曲げて皆さんの目線で話しなさい」「あれこれと質問をするのは止めなさい。被災者の気持を知りたければ、手を握って体温で感じなさい」と私に論すように語りかけられた。その黒田さんの心のこもった現場指導は忘れられない。

#### 被災者の自立支援

黒田さんの活動の原点は、避難所や仮設住宅における被災者の見守りや自立支援の活動にある。西神の仮設住宅では、敷地内に建てたテントに常駐し、不眠不休の見守り活動を展開された。毎日のように、一軒一軒の扉をノックして、声をかけ、生活の援助や悩みの相談に乗られた。閉じこもりの被災者に対しても、粘り強く声をかけ、手を差し伸べられた。この献身的な見守りの結果、1060世帯が居住する大規模仮設団地であったにもかかわらず、4年間でわずか3人の孤独死しか出していない。

私は、気仙沼の面瀬の仮設住宅で黒田さんに見せていただいた「支援ノート」が忘れられない。一人ひとりの被災者について、その日々の体調や言動などが克明に記されていた。「今日はお孫さんの話をされた」「昨日より顔色が良くなっている」「住宅再建をどうするか悩んでいる」といったメモがぎっしり書き込まれていた。「被災者に寄り添い、ひとり一人を大

切にする」という黒田さんの思想が、そこにはあった。なお、この支援ノートは現在、気仙 沼市役所で大切に保管されている。

黒田さんの被災者支援では、「与える支援ではなく、引き出す支援に心がける」という思いが貫かれている。黒田さんが西神の仮設住宅で真っ先に取り組んだのは、被災者相互で支え合う場をつくる、生きがいを育む場をつくるということであった。それが「ふれあいセンター」という仮設住宅内での集会所の設置であり、「伊川谷工房」というサポートセンターの設置である。伊川谷工房では、その名称にも示されているように、手芸などの生きがい仕事を身につける就業支援に力を入れており、力を引きだす支援が実践されていた。

#### 避難生活環境の改善

黒田さんは、避難所や仮設住宅の「非人間的で劣悪な環境」を解消しなければ、被災者の自立も復興もないとの思いから、その環境を改善する活動に制度面も含めて積極的に取り組まれた。兵庫県は震災後、避難所のあり方を検討するための委員会を2度にわたり設置している。その第1は、2005年の「避難所管理運営等に関する調査委員会」であり、その第2は2013年の「避難所等におけるトイレ対策検討会」である。最初の避難所管理運営の委員会には、私もご一緒させていただき、黒田さんの発言から学ぶことが多かった。

黒田さんは、その委員会の主要メンバーとして、運営マニュアルの整備、医療看護体制の充実、仮設トイレの改善、さらには福祉避難所の設置などについて、建設的な提言をされている。避難所のトイレ問題をいち早く提起されたのは、黒田さんではなかったかと思う。震災直後の7月に出された「阪神高齢者・障害者ネットワーク」のニューズレターで、「トイレに行く回数を減らす為に水分摂取を控え、ひどい脱水状態となり大勢の高齢者がたおれた」とその問題点をいち早く指摘されている。

黒田さんは、仮設トイレの構造面の改善を指摘する人の多い中で、関連死防止や感染予防の観点からの運用面の改善を提起されており、汚物の処理など現場での問題解決の道筋を示された。兵庫県の「避難所等におけるトイレ対策の手引き」(2014)の中に示されている、衛生面に配慮したトイレの清掃方法、トイレの障害者や高齢者への配慮といった部分には、黒田さんの思いがしっかり反映されている。私は、被災地でトイレ掃除に関わることが多いが、そのノウハウは黒田さんから伝授いただいた。

黒田さんは、福祉避難所の設置とその改善にも尽力されている。2004 年の能登半島地震での国民宿舎を活用した福祉避難所の自らの体験を踏まえて、2005 年に設置された内閣府の「災害時要援護者の避難対策に関する検討会」の委員として、福祉避難所の必要性を強く主張されたのは黒田さんであった。福祉避難所へのヘルパーさんの派遣を強く求めたのも、黒田さんであった。ひとり一人を大切にするという視点から、傷病者や障害者が健やかに健やかに過ごせる場づくりに努力されている。

#### 後継者育成への熱い思い

黒田さんは、「被災者の見守り」、「避難環境の改善」に負けないくらい、「後継者の育成」に力を入れられていたように思う。黒田さんが、いたるところで若い看護師の皆さんに対して、とても厳しい口調で指導されている姿を見た。そこでは、「人としてのあり方を教えたい、真剣に向き合う大切さを教えたい」という、黒田さんの教育者としての熱い気持ちがあふれていた。

黒田さんは、看護師向けの「災害看護」という教科書の中で、「支援活動を行う際、自分の言動が相手の人権を無視することになっていないか、相手を傷つけることになっていないかを考え、相手を思いやってほしい」と訴えられている。災害看護の心を伝えようとされていた。この心を伝えるということでは、教室で知識を詰め込むよりも、現場で倫理を磨くことの方が大切と考え、現場での実践を通じての厳しい教育に力を入れられていた。

#### おわりに

黒田さんは、「現場にこそ真実がある。現場に来て学びなさい」と、何度も何度も口にされた。「大学の偉い先生は、ちっとも現場に来ない。そんな先生の言うことは信じないようにしている」という、黒田さんの私たちに対する批判は、今も私の耳元に残っている。この批判を忘れずに、黒田さんの理念と責任を受け継いで、被災者支援の現場に立ち続けたいと、思う。

#### 謝辞

黒田裕子氏の名前の読み方は、正しくは「ひろこ」であるが、「ゆうこ」でも親しまれています。5.2 節で小林氏が述べている通り「どっちでもいい」とおっしゃっていたことや、本人が「ゆうこ」という響きが好きだったという話を伺い、本レポートでは、あえて「ゆうこ」と記載することにしました。

なお、本プロジェクトを進めるにあたって、センター長の河田先生を始め、上級研究員の 先生方、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の室崎先生には、終始適切な助言と丁寧な 指導を頂きました。ここに感謝の意を表します。

加えて、ご多忙にも関わらず、快くヒアリング調査にご協力頂いた皆様、資料閲覧にご協力頂いた気仙沼市役所の皆さまにも感謝申し上げます。

最後に、本プロジェクト立ち上げに際して、呼びかけに応え、2年間共に活動してくれた 研究メンバーの皆さんには常に刺激的な意見をいただき、精神的にも支えられました。誠に ありがとうございました。

> 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 主任研究員 木作 尚子

#### 特定研究プロジェクト

「黒田裕子氏の資料等分析による被災者支援の検証と継承」

#### 【研究メンバー】

代表 木作 尚子 人と防災未来センター 主任研究員

中平 遥香 人と防災未来センター 震災資料専門員

髙岡 誠子 人と防災未来センター 研究員

高原 耕平 人と防災未来センター 主任研究員

#### 【顧問】

甲斐 達朗 大阪府済生会千里病院・千里救命救急センター顧問

人と防災未来センター 上級研究員

室崎 益輝 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授

# 資料編

#### 黒田裕子氏の活動の軌跡

$\rightarrow$															1997	'				_			_													_								
49	S53	S59	S63	H2	НЗ	H4	1	_	6	6	7	Н8			Н9		_	_	_	7	H10		+		_	9	8	9		H12				H13		Н	114						_	_
							月17日		月3日	月 15 日	月 31 日															月 14 日	月 17 日	月 21 日	月 27 日															
																																				1								
							収神・沙																				版トルコ	台 湾 921																
							必路大震																				・イズミ	大地震																
							愛																				ミツト地	辰																
兵	武	宝					宝			西加													+																					
医科士	川高笙	市立会					市総合			第7個	宝塚市												1	Ī	•	. 川			西神															
/学勤發	看護学	院設立	日本北	米国に	ホスピ	アメリ	体育館	オーフ	名古屋	設住空	立病院	「西海											1	Ê 日 大	市	房・ち			了 仮	7						豆	「 ゆ ぜ							
735 	子院卒#	光見	小スピ	における	え・ユ	カ・・	昨に救	トラニ	産でこ	七に40	死を退職	7.											j	が死の時	基金	めじさい			設住宅	1 7						単死の節	りは							
エース	来	病院勤	・在	るホス	ボーム	ミシガ	護所を	リア :	ながた	量テン	職	仮設住											;	プロス	· KOBE	いの家			終了	布望の						職 床 研	- 患							
コール		務の	モケア	ビス視	ケアワ	大学	設置。	ホスピ	支援ネ	トを設		宅見守											2	フ究へ	理事	しスタ				灯り						究 会 .	者 · 遺							
の向こ		ちに副	研究会	察(二	ーカー	老年期	救護セ	ス研修	ットワ	置。		り連絡											19	引 世 设 話 人	長	۲				呼びか						本部	族の会							
う側		総看護	副開	л   П	養成購	~セミナ	ンター	-	<u>ا</u> 2	阪神		会																		が人						世	代表							
略歴上		婦長	事長	ゴーク。	野座修っ	/ 修っ	上避避		世話	<b>高齢者</b>		女とよっ																								咒	<b>登</b> 話							
Ď			(看護朝	週間)	,	,	群の質		へ会開発	章書		17																									^							
			<b>配会代</b>				役合的			有支援·																																		
			委				機能を		阪神高	ネット																																		
							1 ケ月		齢者・	ワーク																																		
							継続		障害者	二副代																																		
									支援さ	表																																		
									イットロ																																			
						ı			シーク			日日	日市神			Ξ	Ξ	日	_		嬉	Ξ.		Ξ						兵	兵 神	· =	Ξ	復	兵	บ	神	5 N	I N	海	_	日	日	
						こころ			一に再		阪神・	本が書	こ民戸市 二		生活復	重県タ	重県立	本看護	市民と	日本災	野町保	重県緩	1 K	重県・						庫県介	車戸中	重見市	重県准	興住宅	庫県	ようご	戸市に	プトロと	P O 法	外災害	あじさ	本看護	本災害	
						の看護			編。		淡路大	救急学	一プロ		興県民	ーミナ	看護大城	研究学	ZGO	害ボラ.	健計画	和ケア		防災ボ						護保険	反 申 長福	町村社	看護師[	П /// П	参画」-	安心人	協働」	互びのの	人しみ	援助市	か会」	管理学	看護学	di dada
						3号:					展災 地	会会員	阪神・池		ネット」	ル検討	字講師	会理	の「阪	ンティア	策定専問	検 : **	F-7K - 7	フンティ						番 点 会	各部企	会福祉	国家試	ニティ	と「協	材訓練	と「参	防働会	ん事業は	氏センな	事務局 🖺	会評		
						から「-					兀NGO救		淡路大電		企画	安員会		#	災」国際	アネット	鬥委員	貝	Name of the least	イアコー						安介護	复具计	協議会を	験問題	文援研究	劉二委	センター	<b>画</b> 委	世記	サポート	1 +		腋委員	<b>藤委員</b>	
											援連絡		震災被%		安員	委員			除フォー	- 1 1										総定等	型 後 明 に	住宅福祉	作成委員	究会世話			貝	^	トネット	文援部長				
						コールの					会議」		災地から						ーラム	ご幹事				イーター						音 法	o 力 手 #	1.評価給	貝 (平成	宀		定策定委			トワーク	x				
						向こう					分科会		の緊急						実行委	-				-養成検						会委	進衰亡	計委員	14年ま			育 (兵			理事					
						側連					仮設な		・要求						員					討委員						員			Sで)			(庫県)								
						載開始					七宅支援		生命の の																															
											連絡会		会																															
											会員		平 成 10																															
													5 月 22																															
											フェリ		西神第				神戸新		国際ソロ						状态	申				神戸市ま		営活動学	申									高齢者	神戸市社	
											ンモ 「サ	区感謝状	6、 19 住				聞社会賞		1プチミ						仮記住	支				区長齢		pi ī	· 司 更									障害者	会福祉	
											ンタクロ		宅自治△						スト神戸						年任日1	起主民				樹状		F	を折割さ									支援ネ	協議会	
											コース賞		云感謝状						ア 表彰出						10000000000000000000000000000000000000	E -						1	er e									ットワー	感謝状	
							害	平_		# Re		_ 3		¬-	_		4	ž			_	_	1		語	R H						i	或 圣			_	J	_				اع	(阪 神	
_			- 1	'											1		- 2	<u>™</u>	Ę		生	₹	特													- 1	î	F						
							対策本	成7年	毛華具	A A A A A A A A A A A A A A A A A A A	1	生活復興	- 民 度開出法 始	生活支世	介護保险		Die die	神神	重		活再建	0法)	定非														防災+	庫県】						
							対策本部設置	平成7年兵庫県南部地震災【兵庫県	元軍具	置版神・淡路復興対策本部設		「生活復興局」設置	<b>家−是出市民立法「生活再建救助法制度開始</b>	「生活支援アドバイザー」【兵庫県】	「介護保険法」制定			に 明られ 一覧の			「生活再建支援法」制定	70法)」制定	「特定非営利活動促進法														人と防災未来センター設立	<b>兵庫県</b> 】						
	649	兵庫医科大学勤務 武庫川高等看護学	49     553       559     武庫川高等看護学       宝塚市立病院設立、     宝塚市立病院設立、	49     553       559     \$63       武庫川高等看護学     日本木	449 \$53 \$59 \$63 H2  兵庫医科大	449   S53   S59   S63   H2   H3	S53   S59   S63   H2   H3   H4	1月17日   阪神・淡路大震災   宝塚市総合体育館に救護所を設置。救護センターと避難所の複合的機能を1ヶ月継続   宝塚市立病院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   宝塚市立病院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   宝塚市立病院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   宝塚市立病院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   宝塚市立病院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   宝塚市立病院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   宝塚市立病院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   田本ホスピス・在宅ケア研究会   副理事長 (看護部会代表)   宝塚市道院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   電路会代表)   宝塚市道院設立、同病院勤務。のちに副総看護婦長   電路会代表)   コールの向こう側』略歴より)	148	6月3日	19   19   19   19   19   19   19   19	19	旧	18	10   10   10   10   10   10   10   10	19   19   19   19   19   19   19   19	19   19   19   19   19   19   19   19	日本本文ピス・在宅ケア可示会 副理事長 (看護部会代表)   1935   1945   19	19   19   19   19   19   19   19   19	19	10	10   10   10   10   10   10   10   10	100   10	10   10   10   10   10   10   10   10	11   1   1   1   1   1   1   1   1	11   1   1   1   1   1   1   1   1	10	10   1   1   1   1   1   1   1   1   1	10   1   1   1   1   1   1   1   1   1	1	11   1   1   1   1   1   1   1   1	11   1   1   1   1   1   1   1   1	11   1   1   1   1   1   1   1   1	11   1   1   1   1   1   1   1   1	10   10   10   10   10   10   10   10	10.1   1	日本美の原産研究会   1480 世級人   1480 世	10   10   10   10   10   10   10   10	1日本等の選出版表表」   1日本等の選出版表表   1日本等の通出版表表   1日本等的通知的表面   1日本等的通知的表面	103   10	「日本での日本日本で、	1	100   10	1

2					2003						2004							200						2006	_	2007		2008				09 201			_	2012		2014	- 1	2015
1					H15	i					H16				5 月 12:	10 月 23 日	10 月 29 日	H1	7					H18		3 月 25 日	7月	H20			H2	1 H2			3	H24	H25 3 月		9 月 24 日	H27
															日	23 日	日									日	月 16 日					月 11: 日	i		月11日			1	E	
															四川大地震	新潟県										能登半	新潟県				T	ノイヲ北震	\ { E		東日本大震災				T	
															理震	新潟県中越地震										能登半島沖地震	新潟県中越沖地震					項票	P. District		震災					
																											莀													
			••••															13	Į							•••••									ļ					<b>&gt;</b>
					自治	智慧の	明石	1 はた	5 月	もが		神戸					「阪	『阪神高齢者・璋男住宅での支援スター	E					日本《		ひょ							日本財	関西学	気仙沼市面瀬中学校で避難所支援活動、		学位取得		牧郷島	NPO
					自治組織活性化のための円卓会議	智慧の広場		目たんの会		「がんと共に歩む会」		神戸市「震災10年 神戸からの発信」支援会議					仲高齢者	「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」理事長もての支援スタート						日本災害看護支援機構設立、理事長		ひょうごがん患者会連絡会 副会長							日本財団の協力により、	関西学院大学災害復興制度研究所 研究員	<b>面瀬中学</b>		侍 (学術)		牧郷島根果にて逝去(73歳)	NPO法人阪神高齢者・
					化のた	世話人	り市民	代表	100 年 季	歩む会		10年神					1. 障害	1・障害						支援機		患者会							により	害復興	校で避			i	逝去	高齢者
					めの円も		整世話人					だ戸から					者支援*	者  支援						構設立、		連絡会									難所支援			į	73	・飼害も
							员		多員	Ì		の発信					イットワ	个ットワ						理事長		副会長							<b>有護支援</b>	新研	<b>拨活動、</b>					障害者支援ネットワーク解散。
					代表							」支援会					Í 2	Í								2 0 1							機構と	<b>究</b> 員	その後					5 F 5
																	「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」が特定非営利活動法人化	理 事 長								(2010年4月より会長)							災害看護支援機構として支援活動(3月30日~)		その後面瀬仮設住宅で24時間見守り活動					一ク角帯
												メンバー					営利活									月より合							活動(		住宅で					
																	動法人化									長)							3 月 30		24 時間					to the second
																	ı																5		元守り活					けれては他
																																			動					1
																																								力し者で
ラ N N ジ P P	海 - 外 a	¬ Б	9 E	日月	N P	医学	人と	、国建			三重	N P	命と	兵庫				内閣	兵庫	内閣	災害	兵庫	兵庫県	神戸	兵庫			先端	兵庫	日本	中原国	<b>オ</b>		がん			兵庫			
ラジオ関西企画委員NPOと行政の協働	災害援助	できい合	日本旨蒦奈里学会	に	NPOひまわりの会	医学ジャーナリスト	防災未来	防災世界	1		三重県・さくら病院	のつざい	生きがい	県「人と				床  以	見 復興っ	府災害時	福祉広域	県 看 護 谙	県「避難	市地域家	県地域防			医療と市	県・いの	災害看護	・北京師	<b>も</b> し ト		患者団体			県「避難			仁意区位 - 関本語歯者・固力し者が投げ、十二十二人」
ラジオ関西企画委員NPO法人しみん事業サポート	海外災害援助市民センター・あしさい会」 事系原長	1 事务=		77	りの会		センター	会議地	1			NPOつどいの場「さくらちゃ	命と生きがいプロジェクト震災委員	兵庫県「人と防災未来センター					1月月1985年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	要援護者	災害福祉広域支援ネットワーク	界災害	所管理事	着型サー	兵庫県地域防災検討委員会 委員			民の協	ちと生き	日本災害看護学会被災地先遣隊 委員	範大学《	5 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		がん患者団体支援機構 副理事長			兵庫県「避難所等におけるトイ			こに利名
芸議 世話			平義委員	推進権	理事	会員	ーボラン	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			顧問	いくらち	・クト震	ヘセンター				ア沢東	ノップ委員	避難対	トワー	写護支援-	営等に	-ビス運	<b>資</b> 会			断を考える	がいプ	火地 先遣	火害復興 2	2 1		神副理事			arta ト			ŕ
人トネット	支援部 長			記委員			ティアコ	国連防災世界会議地元推進協力委員会 委員				ゃん」運	災委員	しボラ				杉計会	į į	策に関す		ネットワ	関する調	神戸市地域密着型サービス運営委員会(委員)	委員			るシンポ	ロジェク	隊 委員	プロジェ	世		長						
人トネットワーク理事	_						人と防災未来センターボランティアコーディネーターコース	委員	į			ん」運営委員		·」ボランティアコーディネーター				<b>55</b> 0E		内閣府災害時要援護者避難対策に関する検討会・委員	「サンダーバード」理事	兵庫県看護境界災害看護支援ネットワーク検討プロジェクト	「避難所管理運営等に関する調査委員会」委員会	委員				先端医療と市民の協働を考えるシンポジウム実行委員会 副委員長	兵庫県・いのちと生きがいプロジェクト企画委員会 委員		中国・北京師範大学災害復興プロジェクト 委員則臣法プロジェクト 委員	養					レ対策検討会」			
事							イーター							/コーデ						委員	ード」理	プロジ	五」委員					大行委員	女員会 悉		員	B.								
							コース							ィネータ							争	ェクト	云					会副委	員											
							企画会議 委員																					長												
							委員							研究委員会 委員																										
		1.3	直油	除金	2+									委員				前	1	Æ		#							В	Rh	3	<b>•</b>		£	E		В	E =	. 55	
		で () ()	高鈴沓・章雪沓を爰ネットフーウと神戸市社会福祉協議会 感謝状(阪神	障害者支援ネットワークとして)	!会ポラン													朝日社会福祉賞受賞	Í	兵庫県震災復興功労賞受賞		井植文化賞(社会福祉部門)受賞							日本災害看護学会功労賞	防災功労者防災大臣表彰	1 	申5 万万女力分子支衫		兵庫県看護功績賞	兵庫県社会賞		日本看護協会長表彰	兵庫県知事 感謝状ランタリーフラザム	兵庫県社会福祉協議会・ひょうごボ	
		H-121 Alimber	音者 支援。福祉協議へ	ネットワ	ティア 賞													社質受賞		復興功労		(社会福							護学会功力	防災大臣:	I to	力分析長		功績賞	賞		会長表彰	感謝状感	福祉協議へ	
		,	イットフェ 感謝状	ークとして	(阪神高 ・															員受賞		祉部門) 平							労賞	教彰	1	8						詩	でいま	
		į	- - - - 阪神	١	者・													$\perp$	7,	<u> </u>	災										$\perp$								11	_
																			「フェニックス共済」創設	【兵庫県】	害時要援	「兵庫行動枠組」採択																		
																			クス共済		護者避難	枠組」採																		
																			創設		又援ガ	扒																		

### 関連文献リスト

		771						
	著者	題名	雑誌名・書籍名	発行年	巻	무	開始頁	終了頁
1	黒田裕子	明日に備える: 地域における高齢者の福祉と医療を考える (講演記録 がん患者・家族のサポート: 患者会・支援団体の今、そしてこれから)	ホスピスケアと在宅ケア	2015	23	1	81	86
2	黒田裕子	被災地はいま:被災地の被災者の今 ~あの日・あの時からの継続支援の現場から~	エマージェンシーケア	2014	27	1	102	103
3	黒田裕子	P2-6 阪神淡路大震災被災者の PTSD 値や睡眠健康は「早寝、早起き、朝ごはん」リーフレットを用いた生活介入によって改善されるか?(日本生理人類学会第 68 回大会発表要旨,学会記事)	日本生理人類学会誌	2013	18	3	147	_
4	黒田裕子	講演録(要約) 震災と人権: 国家公務員として出来ること(要約)	人権のひろば	2012	15	3	16	19
5	黒田裕子	グリーフケア・心のケア:東日本大震災から更に考察 (特集 東日本大震災からの復興を考える(2) 東北の風土・特性を踏まえたソフト面での課題と対応)	21 世紀ひょうご	2012	12	_	44	51
5	黒田裕子	災害と介護 (特集 震災と在宅ケア)	日本在宅ケア学会誌	2012	15	2	8	12
7	黒田裕子	C-2 阪神淡路大震災後 17 年経過時における被災者の PTSD スコアについて (日本生理人類学会第 66 回大会発表要旨,学会記事)	日本生理人類学会誌	2012	17	3	138	_
8	黒田裕子	災害時には互いに支え合い利用者に寄り添うことが大切	介護保険	2011	185	_	24	26
9	黒田裕子	地域の人々のこころを支える医療:東日本大震災の在宅医療の現場から (特集 地域のいのちを守るために:医療崩壊を乗り越える)	ガバナンス	2011	128	_	30	32
10	黒田裕子	災害看護ボランティア活動の拠点として(特集 東日本大震災初期から今に至る災害医療活動から みえてきた課題)	臨床看護	2011	37	13	1790	1793
	酒井明子 黒田裕子 山崎達枝	福島・宮城第一次隊 (特集 東日本大震災) (先遣隊活動報告)	日本災害看護学会誌	2011	12	3	12	15
12	黒田裕子	会長講演 地域とともに歩む災害復興と看護の経験知「いのち」と「くらし」を育む災害看護	日本災害看護学会誌	2010	11	3	3	15
13	黒田裕子 漆崎誉子	「兵庫県西部地域の水害(台風9号)」被害の現状報告先遣隊としての初期調査から	日本災害看護学会誌	2009	11	2	59	70
14	黒田裕子	地域住民とともに防災推進について;実践を通して(特集 2:駿河湾地震震度 6 における対応;長年の備えはどういかされたか)	臨床看護	2009	35	14	2196	2197
15	小原真理子 黒田裕子 酒井明子	新春鼎談 在宅・施設ケアの本質をつかむため"災害看護"を学んでほしい	コミュニティケア	2008	10	1	35	39
16	黒田裕子	災害時における社会資源の活用	酒井明子, 菊池志津子編『災害看 護 看護の専門知識を統合して 実践につなげる』南江堂	2008	_	_	143	145
17	黒田裕子	災害とボランティア:避難所・仮設住宅・復興住宅の体験を通じて(特集 防災と障害者)	福祉労働	2007	115	_	84	94
18	黒田裕子	被災前、被災時に、知っておかねばならないこと (特集 マニュアルだけではわからない 災害時に 備えておきたい ナースがやること、できること)	ナースビーンズ	2007	9	10	12	18
19	黒田裕子	災害と QOL — 災害の体験をとおして, 真の QOL とは何かを再構築 (特集: 看護に活かす QOL の原点)	臨床看護	2007	47	2	137	141
20	黒田裕子	"地域"の中で考える災害看護いのちを"看護"が救うために (特集"地域の看護力"で災害に備える)	コミュニティケア	2007	9	10	12	18
21	黒田裕子	神戸発!阪神淡路大震災後の高齢者の住まいと暮らし、そして支援(第 <b>9</b> 回)被災者とともに歩んできた経験を通して	いい住まいいいシニアライフ	2007	79	_	10	17
22	黒田裕子	阪神大震災を通して自己の可能性を見つける ―人と人とが向き合うなかでの私―	似田貝香門編『ボランティアが社 会を変える』関西看護出版	2006	_	_	18	78
23	黒田裕子	阪神・淡路大震災および他の災害の体験をとおして (第 1 特集 災害看護災害の前に,そのとき,そして,その後の看護)	臨床看護	2006	32	13	1900	1906
24	黒田裕子	阪神・淡路大震災時の体験を通じて	看護	2006	11 月	臨時刊号	134	135
25	黒田裕子	基調講演 「人間」と「地域」と「くらし」を支えるということ (第 10 回日本在宅ケア学会学術集 会)	日本在宅ケア学会誌	2006	10	1	9	12
26	黒田裕子	阪神・淡路大震災から 10 年社会は看護職に何を求めているか (特集 災害看護の現場から災害看 護学構築に向けて(I))	看護教育	2006	47	2	137	141
27	黒田裕子	災害ボランティアの活動と医療コーディネートナース (特集: 看護基礎教育で教える災害看護新たなカリキュラム構築の実現)	看護展望	2006	31	8	902	903
28	黒田裕子	これまでの $10$ 年と今後に向けて(メッセージ:阪神・淡路大震災から節目の $10$ 年 災害看護のこれからの「進展」へ向けて  一災害看護メッセージ 備え)	ナーシング	2006	26	3	108	_
29	黒田裕子	第7回 日本赤十字広島看護大学特別講演会 災害時における看護師の役割災害時の体験から学ぶ	日本赤十字広島看護大学紀要	2006	6		55	68

30	黒田裕子	住民(市民)と看護者との連携、協働と参画ひとりの人としてのいのちを重んじるために (〔日本 災害看護学会第6回年次大会〕シンポジウム)	日本災害看護学会誌	2005	6	3	75	80
31	黒田裕子	震災を契機に根付いた NPO・ボランティア活動の現状 (特集 震災 10 年)	ひょうご経済	2005	85	_	26	30
32	黒田裕子	インタビュー 黒田裕子さん 災害ケアから看護の原点がみえてくる (特集 災害のとき医療は)	クリニカルスタディ	2005	26	8	600	604
33	黒田裕子	震災を契機とするボランティア・市民活動の展開 (特集 阪神・淡路大震災 10 年)	都市政策	2005	118	_	73	84
34	黒田裕子	特別寄稿 民間非営利組織と地域コミュニティとの良好な関係のあり方についての考察阪神・淡路 大震災を契機として	21 世紀ヒューマンケア研究機構 研究年報	2005	11	_	39	50
35	黒田裕子	避難所における看護ケア 救護センター併設の必要性 (総特集 自然災害・事故・テロ時の看護阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件から 10 年間の日本の蓄積)	インターナショナルナーシング レビュー	2005	28	3	52	59
36	黒田裕子	阪神・淡路大震災を契機とした NPO、ボランティア団体の活動評価および地域社会に及ぼす影響の 検討民間非営利組織と地域コミュニティとのより良い関係性のあり方の分析	ヒューマンケア実践研究支援事 業成果報告書	2004	200 4	_	171	185
37	黒田裕子 島田誠 他 4 名	シンポジウム:震災ボランティアの 10 年 (特集 震災ボランティアの 10 年)	ボランティア学研究	2004	5	_	63	89
38	黒田裕子	震災が生んだ新たなコミュニティケアづくり	コミュニティケア	2003	5	1	57	59
39	黒田裕子	かお 震災後8年、今なおボランティアとして奔走する黒田裕子さん(阪神高齢者・障害者支援ネットワーク副代表/しみん基金・KOBE理事長/日本ホスピス・在宅ケア研究会副理事長)	看護	2003	55	1	59	61
40	黒田裕子	死にゆくホスピス	ホスピスケアと在宅ケア	2001	9	3	248	251
41	黒田裕子	高齢者・障害者に向き合って日々の活動を通して考える	都市政策	2001	103	_	106	116
42	黒田裕子	この人に聞く 私がすすめる家族のみかた (特別企画 2001年、ひろがる医療の意味とわたしにできること)	消化器外科 nusing	2001	6	1	16	20
43	黒田裕子	仮設住宅でのボランティア活動—「人間」と「生活」を視点に(シンポジウム:体験を踏まえた災害 看護学発展への提言)	日本災害看護学会誌	2000	2	1	3	9
44	黒田裕子	看護 TOPICS 阪神・淡路大震災 5 年目に考える活動の振り返りと今後の課題	看護実践の科学科学	2000	25	2	51	55
45	黒田裕子	「ふれあいテント」ボランティア活動西区を中心とした活動を通して (特集 阪神大震災後の生活 再建)	都市政策	1997	86	_	57	71
46	黒田裕子	被災地・避難所の医療環境問題	日本集団災害医療研究会誌	1996	1	1	46	49
47	黒田裕子	ナースコールの向こう側(サンルート・看護研修センター)	(単著)	1996	_	_	_	_
48	黒田裕子	自分には何ができるか,何を求められているのか (阪神大震災,その時看護は…<特集>)	看護学雑誌	1995	59	5	470	471
49	柳田邦男 酒井明子編	災害看護の本質 語り継ぐ黒田裕子の実践と思想 (日本看護協会出版会)	(編著)	2018	-	_	-	-
50	宇都幸子 西川達也	故 黒田裕子さんの足跡 (インタビュー 第30回 東京弁護士会人権賞 受賞)	Libra	2016	16	4	30	33
51	中川愛子	東日本大震災ボランティア活動報告 黒田裕子さんを偲んで、共に活動した面瀬から	ホスピスケアと在宅ケア	2015	23	1	4	6
52	室崎益輝	被災地の天使・黒田裕子さん : その思想と行動 (過去に学ぶ)	震災学	2015	6	_	101	111

# P<sub>10-3</sub>

### 黒田裕子氏関連資料の活用に向けた取り組み ~人と防災未来センター資料室における整理・展示~

人と防災未来センター 震災資料専門員 中平遥香 研究員 木作尚子 高岡誠子 高原耕平

#### 発表の目的と概要

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター資料室に寄贈された故黒田 裕子氏関連資料の一部を用いて実施した**企画展示「被災地のナイチンゲー** 

裕子氏関連資料の一部を用いて実施した企画展示「被災地のナイチンケー
ル 〜黒田裕子の遺したもの〜」について報告する。
人と防災未来センター資料室では、2019年12月13日から2020年3月8日にかけて、
1995年以来我が国の災害看護を牽引した県口裕子氏の事績を展示する企画展を実施
している。展示物には資本を一次資料も含まれており、これまで数百名の受害が
訪れている。研究チームは黒田氏関連資料の精査と研究を本年度より進めているが、
本発表ではまず企画展の機要を報告する。本研究プロジェクトは、苦贈資料等をも
とに、黒田氏の汗動を再精査し、今後の彼災者支援のあり方を検討することを目指
している。
展示アーマに至るまでの経緯
2018年9日、歌神原命者・瞳がい名支援ネットワーク(現代表:宇都幸子氏)か

2018年9月、阪神高峰者・障がい者支援ネットワーク(現代表: 宇郡幸子氏)から、20年以上にわたる黒田氏の活動で生じた資料が当センター資料室に寄贈された。 薄冊で約200点ほどである。







人と防災太共センター収蔵庫での整理作業の様子(ヘ个/)

帯贈資料には、刊行物以外に当時の仮改住 宅での支援活動を定期に伝える資料や、集 田氏の講演資料など、黒田氏の活動の実態 や、黒田氏の考え方、思考、罪念を知出で きるものが豊富に含まれている。チームは 思田氏の考え方活動を評明する上で価値 高い資料であると考え、その継承と活用に 向けた即は別まる事件と 向けた取り組みを開始した。



#### 研究チーム

研究チームは専門分野の異なる4名の資料専門員・研究員で構成している。 (各自の担当は以下のとおり)

資料専門員

歴史学









災害看護

高原 臨床哲学

#### 今回の資料室企画展の目的

- マ四の資料至企画展の目的

   従来「被災地のマザー・テレサ」と呼ばれてきた黒田裕子氏の、多面的な人物像を改めて掘り下げる。
   被災者に対する転身的なボランティア看護師としての姿だけでなく、支援活動を合理的に組織化し改善してゆく瑩型者としての姿、後進を厳しく育てる数育者としての姿、法制度等の改善のために奔走する改革者としての姿も重要であると考え、「被災地のナイチンゲール」という人物像を提示することを目指した。
- 2. 寄贈資料の活用と、その課題(とくに個人情報を含む一次資料)を探る。
  - ▶震災を知らない人々も当時の状況を追体験することができる。

  - ▶ 風炭を知らない人々も当時のい況を追吟映することができる。
     25 年前の廃災当時を体験することはできず、時代背景を想慮することも容易ではない。一次資料は、当時を追体験・イメージする手助けをしてくれる。
     ▶ 当時の様子を多面的にとらえることができる。
     活動報告書や自伝などの刊行物は、編集側の視点が入っており、作者の伝えたい人容がまとめられている。一次資料は、見る人によって視点が違い、様々な気づきが生まれる。

#### 展示の内容





(↑)企画展の広報チラシ。「河田文庫」(河田恵昭センター長寄贈文庫)の案内展示と同時開催。

(←) 人と防災未来センター 資料室での展示の様子。展示 板要を脱明するポスター、活 数字を脱明するポスター、活 かて入内)、資料 ケース内)、質料 写真を展示している。



#### 仮設住宅入居者 ケース記録ファイル

西神第7仮設住宅の支援対象住民のケース

西神第7仮設住宅の支援対象住民のケース 記録(支援が必要な住民1名ずつの訪問記録) を綴じたファイル。当時の被災者支援活動の 実態をもっとも克明に伝える資料である。 黒田氏と「ネットワーク」の支援者たちが、 住民の表情や体調、生活状況を緻密に観察し、 会話を交わし、ときに励まし、最期を看取る 様子が記録から浮かび上がってくる。

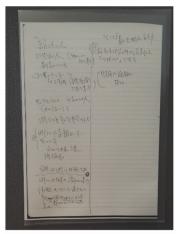
- ▶当時の既刊の活動報告書などを見ても、被 災者と支援者の間で実際にどのようなやり取 りが行われたのか、なかなかわからない。 ▶それに対してこの資料は仮設住宅入居者と のやりとりを克明に記録しており、そこにい た人々の息遣いが克明に蘇ってくる。
- ▶今後の災害の被災者支援活動の基礎になる ものでもあると考え、展示することにした。

黒田氏の個人手帳。予定管理よりもメモ書き が多い。中身は打ち合わせのメモや、関係者 の連絡先、講演の記録など。茶革の手帳は晩 年に用いられていたもの。末期がんに侵され、 死期を自ら悟ったことが、筆圧の弱い字でな おも書き込まれている。

- ▶生前の黒田さんに一度だけお会いしたことがある。活動拠点である「伊川谷工房」で30分近くお話を伺っていた。「相手の肌に触れなさい。そのひとが何に困ってるか、何に苦しんでるか、じかにわかります」と黒田さんは話した。
- は話した。 ▶手帳を開いたとき、この紅葉の押し葉が目 に飛び込んできた。本や論文の中にはいない、 別の黒田さんに触れた気がした。わたしが触 れたのか、黒田さんが触れたのか。 ▶展示ケースで、別の方への出会いをしばら 〈待っていただくことにした。(高原)

#### 手帳





現場ノート

黒田氏が支援活動の合間に用いていたと思われるB5版ノートのページ。使用時期不明。 手帳と同様の独特の癖字。

左下と右上に、

左下と右上に、「復興は問いなおしである。問いなおすの深さが違う。 復興を □□で感じたい。」「□□□□人間の役割は「つなぐ」である」という記述が読み取れる。黒田氏の哲学者と しての一面が垣間見える。

#### 展示への反応

- 見学者は黒田氏と直接の関わりがあった方が多い。
- 黒田氏や関係者の写真を見て当時を懐かしむ方や、黒田氏と の思い出話を語り出す方もおられた。看護・医療関連の来室 者も散見される。
- 「資料の存在そのものを知った」「資料の中身を閲覧できないのは残念」「他の資料も見たい」などの声も聞かれた。





【COI開示】筆頭発表者名:中平遥香 本ポスター発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

DRI調査研究レポート 2020-02 DRI Technical Report Series (VOI.47)

#### 黒田裕子氏の資料等分析による 被災者支援の検証と継承

— 発 行∕Published —

2021年3月/March 2021

# 阪神·淡路大震災記念 人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 tel (078)262-5060 fax (078)262-5082 http://www.dri.ne.jp

— 印刷 —

#### 商工印刷株式会社

〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町4丁目5-7 tel (078)221-1113

# 阪神·淡路大震災記念 人と防災未来センター

The Great Hanshin-Awaji Earthquake Memorial Disaster Reduction and Human Renovation Institution (DRI)

http://www.dri.ne.jp



ホームページ DRI Website



調査研究レポート DRI Technical Report Series